

# 太郎冠者を名乗った実業家

## ——益田太郎の生涯

中  
川  
清

### 目次

- |                |  |
|----------------|--|
| はじめに           |  |
| 一 生い立ち         |  |
| 二 ヨーロッパ留学      |  |
| 三 アントワープ高等商業学校 |  |
| 四 実業家としての出発    |  |
| 五 劇作家としての出発    |  |
| 六 勃興期の新派       |  |
| 七 帝国劇場の誕生      |  |
| 八 帝劇女優劇        |  |
| 九 女優森律子        |  |
| 十 コロッケの唄       |  |
| 十一 台湾製糖株式会社    |  |
| 十二 実業家益田太郎     |  |
| 十三 ペニシリン生産     |  |
| 十四 虚像と実像       |  |
| 十五 評価          |  |
| 十六 息子達         |  |
| 十七 次郎冠者        |  |
| おわりに           |  |

## はじめに

二代目実業家という存在は、本人自身あるいは周囲の人々にとって評価が微妙である。創立者である先代実業家の資質と比較されると、多くの場合、二代目実業家の経営者の才能に対する評価は不利とならざるを得ない。大部分の二代目実業家は、忠実な後継者として保守的な態度に終始せざるを得ない。その一方で、芸術パトロンあるいは美術収集家として知られた二代目実業家も少なくない。

ここでとりあげる益田太郎は、発展期にあった三井財閥の総帥として知られた益田孝の嗣子である。太郎冠者の筆名をもって四十本以上にのぼる喜劇台本を書きあげた益田太郎には、さまざまな伝説がつきまとい、なかには周囲の人間が作りあげた虚像と思われるエピソードもある。

これまでのところ、劇作家としての益田太郎をとりあげた資料は、断片的な内容であるとはいえ少なくない。しかしながら、実業家益田太郎について触れた資料はほとんどない。

明治期以降の文人実業家の系譜を辿ることに私は関心を抱いているが、以下の稿では、劇作家及び実業家としての益田太郎の生涯を彼が生きた時代とともに描き出すことにしたい。

## 一 生い立ち

太郎は、益田孝の長男として明治八年（一八七五）九月に東京で生まれている。<sup>1</sup>以下の稿では、その前後の時期における父孝の動向を辿ることにしたい。

大蔵省に出仕して大阪に在勤していた益田孝は、明治六年（一八七三）五月、井上馨に従って官を辞している。同年十月、井上馨が岡田組を設立するとともに、益田孝もこれに参加した。同社は、翌七年三月には先収会社と名を変えているが、のちの三井物産会社の前身ともなる存在である。

明治八年末、井上馨の官界復帰とともに、先収会社は解散となった。このため、益田孝らに同社の残務整理が委されたが、利益分配によって六千円を手にしたと長井実編『自叙益田孝翁伝』（中公文庫 一九八九年）に記されているが、当時としては大金である。

明治九年七月、三井物産会社が設立された三井武之助及び養之助の両名が社主となっているが、二人は三井一族から分籍されていた。たとえ三井物産会社が破綻しても、三井同族には影響を及ぼさないための処置である。同時期に三井銀行も発足しているが、三井家の事業の本流は銀行であり、物産会社は全く傍系的存在であった。

益田孝は三井物産会社の事実上の最高経営責任者となっていた。明治十年の西南戦後では大きな利益を得たものの、その後の三井物産会社の経営は必ずしも平坦ではなかった。

明治十四年の不換紙幣整理とともに金融引締めが強行され、不況が到来している。この時、

「三井物産会社もずいぶん苦しんだ。私はあまり苦しんだものだから、とうとうしまいに酸っぱいものを吐いた。会

社へ出て行って会社の屋根が見えると、また今日もこの屋根の下で苦しむのかと思って、胸が悪くなって来て酸っぱいものが出てくる」

と、『自叙益田孝翁伝』に記されている。

明治六年の時点で話を戻すと、大阪在勤であった益田孝は単身で上京した。この時、品川の御殿山に屋敷を買っているが、「その後だんだん買足した」のが、碧雲台の邸宅である。そして、太郎はこの御殿山の屋敷で生まれている。

前述のように、益田孝は設立間もない三井物産会社の経営に苦勞していたが、明治十四年においては十万三千円の損失を計上していた（第一物産会社編『三井物産会社小史』一九五一年）。

後年の益田太郎には、「財閥の御曹子」（正しくは「三井財閥総帥の御曹子」という修飾語がつきまわっていた。しかしながら、父親の益田孝が苦勞していた時代に幼年期を過ごした太郎は、必ずしも「お金持ちの御曹子」として甘やかされて育てられたわけではないだろう。

ところで、この稿で再三にわたって引用している『自叙益田孝翁伝』には、息子太郎に関する記述はほとんどなく、僅かに次の記述が見られる。

「明治十九年、山県内務大臣、井上外務大臣が北海道視察に行かれた時、私も随行した。私は妻と伴と連れて行った（後略）」。

益田孝が七歳の時（安政元年）、佐渡の地役人であった父鷹之助が北海道勤務となっている。この北海道旅行では、幼年期の益田孝が五年間を過ごした河汲<sup>かみみ</sup>を、妻ゑゑと息子太郎が訪れた。

「（妻ゑゑが）昔益田という役人がこの町へ来ておったことがあるのだが知らないかと言った。するとその男が覚えておって、徳さんという息子さんがあったが、このお子さんは徳さんによく似ていると云うたそうだ。太郎が私の子供の時代によく似ているというのである」。

「徳さん」とは、益田孝の幼名徳之進の愛稱である。右の記述にかかわらず、後年の写真を見るかぎり、益田孝と息子の太郎とは互に似ているとは思えない。

ところで、明治一九年当時の北海道旅行には可成りの困難が伴ったと思われるが、敢えて妻子を同行させたのは、益田孝が幼年期を過した土地を見せたかったのだろうか。あるいは、将来のことを考えて、まだ十一歳そこその幼い太郎に、官界の有力者となりつつあった山県有朋と井上馨の面識を得させたかったのだろうか。ともあれ、益田孝は、長男太郎を甘やかすことはなかっただろう。

のちに、喜劇作者として知られ、父から男爵の爵位を襲爵し、「三井財閥総帥の御曹子」という修辭が生涯を通してつきまとった益田太郎には、様々なエピソードが伝わっている。慶応義塾に在学していた太郎は、明治二十三年に渡英しているが、その動機について次に紹介する伝説が出来上がっている。

先ず、太郎の息子であり、洋画家として知られた益田義信は、随筆集『さよなら巴里』（三修社 一九七九年）に次のように記している。

「父（益田太郎―引用者）は十六歳で、イギリスのケンブリッジのリース中学に留学させられた。させられたには理由があった。そのころ私の家は品川御殿山にあった。祖父（益田孝―引用者）は現役だったので、ある日会社から夜おそく帰宅したら、奥の広間の方から、三味線太鼓の音がきこえてきた。祖父は広間に直行し、ふすまを開けて見たら、

十六歳の少年が品川の芸者を総上げてドンチャン騒ぎをしていたのである。これが原因で父は留学させられたのである」。

次に、白崎秀雄『鈍翁・益田孝 上巻』（新潮社 一九八一年）の記述を引用する。

「（益田太郎が）明治二十二年十五歳の府立一中三年の時、益田夫妻が旅先から日程を繰上げて急に帰宅すると、玄関に粹筋の女の下駄が一杯に並んでゐる。何事ぞと怪しみつつ新座敷と呼んでゐる宴会用の広間をあげてみると、正面に太郎が坐り左右に七十人からの品川の芸者が居流れてゐた。

このままおいては何をしでかすかわからん、といふので益田はこの後ロンドンの中学からケンブリッジ大学に入れ、さらにベルギーのアントワープ商科大学に学ばせ、ここを卒業後ハンブルクのブルックハント商會に勤務させた」。

更に、戸板康二『ぜいたく列伝』（文春文庫 一九九六年）所収の「益田太郎の喜劇」には、次のように記されている。

「太郎の洋行については、じつにおかしな理由がある。

まだ一五歳ぐらいの時、品川御殿山の家の広間に、土地の芸者を総揚げしたというのである。益田家の庭では毎年園遊会を催し、品川の花柳界からも接待に来る。

その時に顔を見知った女を呼べと少年がいったら、おもしろがって、そろそろついて来たというのが真相らしいが、父親が帰宅したら、どんちゃん騒ぎをしているので、びっくり仰天し、『日本にいたら、ろくなことはないから、イギリスに行かせよう』ということになったという次第である。

益田家は御殿山の本宅が一万二千坪、小田原の別宅があるという、まさに大富豪の生活で、（益田太郎は）その総領

だったから、ほしいものは何でも手にはいった。」

右に引用した戸板康二の文章には、不用意な時系列上の間違いが散見される。

先ず、「益田家の庭では毎年園遊会を催し、品川の花柳界からも接待に来る」とある。この「園遊会」が主催していた「大師会」からの類推であろう。弘法大師の命日にちなんでも毎年三月二十一日（のちに四月二十一日）に開催されるようになった大師会の始まりは、日露戦争後の明治三十九年であったと思われる。同年三月二十二日の中外商業新報には、「益田孝氏の大師会」の見出しとともに、この時の園遊会の様子が伝えられている。そして主な賓客として三井八郎衛門男爵、安田善次郎、大倉喜八郎、高橋是清など二十四名の氏名が記されている。この大師会の招待客は充分慎重に選別されており、接待係に芸者が呼ばれたとしても新橋芸者であって、品川芸者ではなかっただろう。その豪勢さで知られていた大倉喜八郎の園遊会である「感涙会」などに比べると、「大師会」は遙かに地味であったと思われる。

大倉喜八郎に成り上り者あるいは成金趣味が濃厚であったのに対して、益田孝は主家の三井一族への配慮からも万事に控え目な生活態度であった。

次に、「御殿山の本宅」である碧雲台が一万二千坪の敷地を有するようになったのは、隣接地を買増していった結果である。また、「小田原の別荘」である掃雲台が建てられたのは、益田太郎の外遊時から二十年が経過した明治四十一年である。この時、益田の別荘に隣接して山県有朋と大倉喜八郎がともに別荘を建てている。

勿論、明治二十二年頃の一般的な評価によれば、益田家は充分に「大富豪の生活」に仲間入りしていただろうが、その頃、父孝は三井物産会社の経営に懸命であった。のちに三井財閥発展に大きく貢献した三井炭鉱の払下げが発表

されたのは、明治二十一年である。そして、益田孝の尽力によってこの炭鉱が政府から三井物産に正式に払下げられたのは明治二十三年である。

こうした状況下にあつては、太郎は益田家の「総領だったから、ほしいものは何でも手にはいった」と、短絡的に推測することは出来ない。のちに喜劇作者として知られるようになった益田太郎であるから、少年の頃に「芸者の総揚げ」といった伝説があつても当然であるという憶測あるいは期待が、無責任に伝記作家の筆を走らせるのだろう。戸板康二は劇評家として知られているが、右に引用した『ぜいたく列伝』は伝記というよりも、気楽な読み物であると考えれば、いささか正確さに欠けるところがあつても許されるのかも知れない。

ともあれ、右に引用した三つの記述は、対象となつてゐる「伝説」の根源は同じであるが、その表現の色づけに若干の違いがある。いずれも伝聞によるものであるが、その発信者が当事者である益田太郎なのか父親孝なのか、あるいは周囲の人間によって語られるようになったのか不明である。

伝記においてしばしば採用される伝説は、常規を逸した内容であるほど魅力的である。そして、その真憑性は看過される傾向にあることに、充分注意すべきであろう。

## 二 ヨーロッパ留学

益田太郎が慶応義塾の幼稚舎あるいは普通部に、いつ入塾し何年度に退塾あるいは卒業したのか、その年度は明確でない。

武内成『明治期三井と慶應義塾卒業生』（文眞堂 一九九五年）に、「慶應義塾入社帳における三井関係会社就職者」が掲載されているが、「慶應義塾入社帳」即ち入学者台帳の「発刊号数」に従って、三井系各企業所属者の氏名が記載されている。それによると、「発刊号数 第十七号」に「益田太郎 特撰三十八」、「三井の所属 三越呉服店」とあるが、「入社（入塾）引用者」年月日などについては「すべて不明」となっている。

ところで、『株式会社三越八五年の記録』（平成二年刊）所収の「歴代代表者・役員一覧」によれば、太郎の叔父益田英作が明治三十七年から大正十年まで同社の取締役<sup>①</sup>に在任していた。一方、益田太郎が三越呉服店に所属した記録残っていない。前出の『明治期三井と慶應義塾卒業生』のこの個所の記述は、益田英作との混同と思われる。<sup>②</sup>なお、叔父益田英作と太郎の関係については、あらためて触れることにする。

更に、『明治期三井と慶應義塾卒業生』の記述によれば、

「益田孝の息子である太郎（慶應義塾入社帳十七号 特撰三十八）は、明治十八年頃の入塾であり、この時期前後の入塾者には藤山雷太（明治十七年九月十日入社、慶應義塾入社帳十七号、慶應義塾勤惰表No.十八）」

とある。なお、ここでいう「入社」が「入塾」であることは前述の通りである。そして、同書の別の個所では次のように注記されている。

「この勤情表は明治五年以降に慶應義塾の卒業生となった者の成績である。ただ、慶應義塾勤情表に名前と成績のない者がいるが、(中略)このなかには、卒業制度ができる同七年以降から二十三年の特選制度の実施までの卒業生が非常に多い。これが特選塾員である。慶應義塾入社帳の順に挙げれば、(中略)入社帳十七号の益田太郎は特三十八(後略)」

とある。要するに、益田太郎は明治十八年頃の入塾と思われるが、塾の正規の卒業生ではないということになる。

明治十八年の入塾とすれば、その頃の益田太郎は満年齢で十歳である。『慶應義塾百年史 上巻』(昭和三十三年刊)によれば、幼稚園が設置されており、その入学者のなかには「すでに地方の小学校を卒業したものが多数いた」と記されている。当時の慶應義塾には中等教育課程に相当する「普通部」も既に設置されていた。しかしながら、益田太郎が入学した当時においては、小学課程と中等教育課程に対する年齢区分がまだ明確に制度化されていなかったと思われる。

先に引用したように、白崎秀雄『鈍翁・益田孝 上巻』には、益田太郎が「明治二十二年十五歳の府立一中三年の時」に芸者を総揚げしたエピソードが紹介されている。また、戸板康二『ぜいたく列伝』は、「慶応の幼稚園、東京府立一中を経て」ヨーロッパに留学と記している。

「東京府が他県に先駆け正則中学校たる東京府第一中学校を建設し開校するのは明治十一年九月であった」(東京都立教育研究所『東京都教育史 通史編二』平成七年刊。以下も同書による)。

そして、

「明治十九年(一八八六)の中学校令によって県立の尋常中学校は一府県には一校、町村立は不可という制限を課さ

れた。（中略）このため東京府においても府立中学校、府立高等女学校、私立中学校をそれぞれ一校という状況であった」。

益田太郎が明治十八年に慶応義塾に入塾したとすれば、同二十年に退塾して東京府第一中学校（当時は、まだ「東京府立第一中学校」という名称ではない）に入学しなければ二十二年の時点で三年生とはなり得ない。

わが国の中等教育制度がまだ十分に整備されていなかった当時においては、経済的に余裕があれば欧米への留学を選択することになるだろう。加えて、「洋行」という箔付け効果が極めて高く評価されていた。

この頃、米国に留学した福沢桃介あるいは高橋義雄は、いずれもイーストマン商業学校に学んでいる。当時の留学生には高等教育を受けるのではなく、中等教育程度の学校で学ぶ者が少なくなかった。

一方、益田太郎の遊学に先立って、父孝は明治二十年三月、三井高保らの一行とともにヨーロッパを訪れている。

訪問先は、リバプール、ハンブルグ、ブレーメン、アントワープなどである。『自叙益田孝翁伝』には、「第一が米の輸出のことを調べるのが目的であった」と記されている。

前章で引用した「このままおいては何をしでかすかわからん」（白崎秀雄『鈍翁・益田孝 上巻』）という理由で、息子をヨーロッパに留学させるような益田孝とは思われない。既に自からのヨーロッパ旅行の時点で、息子太郎の遊学を考えていたのではないだろうか。益田太郎のヨーロッパ留学にまつわる「芸者の総揚げ」は伝説としては華やかであるが、そのまま信用出来ないように思われる。

あとで触れるように、益田太郎には、誤聞あるいは誇張を伴ったと思われるエピソードがいくつか伝えられている。自から太郎冠者を名乗った実業家であれば、周囲の者もその程度の伝説があっても当然と考えるようになったのだら

う。後述の「虚像と実像」の章でもう一度考えることにしたい。

ところで、手塚晃・国立教育会館編『幕末明治海外渡航者総覧』（柏書房 一九九二年）は、外務省など関係政府機関所蔵の基礎資料から作成された幕末・明治期の海外渡航者に関する丹念なデータである。同書には、第三四三五号の索引番号とともに「益田太郎 益田太郎冠者」の項があるが、関係事項のみを次に記す。

生年月日 一九七五年九月

渡航時地位 学生

渡航先名 イギリス・ベルギー

渡航時期 一八九〇年

帰国時期 一八九九年

渡航の目的 財政・金融

渡航形態 私費留学

出身校名 慶應義塾

留学先等 アントワープ商業大学

右の記載に従えば、渡航時期の明治二十三年における益田太郎の満年齢は、十五歳である。

### 三 アントワープ高等商業学校

英国に渡った益田太郎は、なぜそのあとベルギーへと転じたのだろうか。現在の常識で考えれば、太郎がアントワープ高等商業学校を選択したことは、いささか奇異に感じられるが、細谷新治『商業教育の曙（一橋大学百年史稿本）上巻』（如水会学園史刊行委員会 平成三年）には「アントワープ高等商業学校」の項があり、この学校の水準の高さが紹介されている。

現在の一橋大学の遠い源流となる東京商業学校（東京高等商業学校の前身）は、元来、アメリカの商業学校をモデルとして発展して来た。しかしながら、

「この学校（アメリカの商業学校―引用者）より水準の高い商業学校を設立しようと文部省が計画したときに、モデルになるのは高等教育水準の商業学校でなければならない。そこで眼をつけたのが当時ヨーロッパで最高の高等商業学校として注目されていたベルギーのアンベルス高等商業学校だった。この学校の存在は早くから日本に紹介されている。」

英語でアントワープと呼ばれるこのベルギー第二の都市は、本来の地名はフランス語のアンバールAnversである。同校の正式名稱も、Institut Supérieur de Commerce d'Anvers（アンバール高等商業学校）である。そして、

「修業年限は二カ年で、十八歳から二十歳の生徒を入学させ、仏・蘭・独・西・伊・英の各国語と商業に関するすべての教科目を教えている」

と、前出書は記している。

この学校では、講義はすべてフランス語で行われており、更に英語とドイツ語が必須科目となっていた。貿易人の

育成のほか、外交官である領事の養成が、アントワープ商業学校の教育目的であった。一八八七年には、本格的に領事を養成するため第三学年度が設置された。更に一九〇一年には、第三学年度に植民科が開設されているが、アフリカ及びアジアにおける植民地経営及び植民行政の教育を目的としている。

第三学年度終了者に対しては、「商学及び領事学高等学士」あるいは「商学及び植民学高等学士」の称号が授与されていた。益田太郎が学んだこの学校について、日本語で「アントワープ商科大学」の名稱によって紹介している場合が多いが、誤りではない。

但し、この高等商業学校には、外国人学生のための予備学校あるいは、希望科目だけを選択履修する選科修業生制度が設置されていた。益田太郎が本科を正規に卒業したのか、あるいは選科修業生であったのか不明である。

益田太郎が在学していたと思われる一八九八―一九〇二年の時期におけるアントワープ高等商業学校の在籍学生数総計九七二名のうち、ベルギー人五六〇名、外国人四一二名と前出の『商業教育の曙 下巻』に記されている。外国人学生の比率が四二パーセントであることは、この高等商業学校が国際的に高い評価を得ていたことを示している。

しかしながら、一九世紀の終り頃から欧米各地では、総合大学における商学部の開設あるいは商科大学の新設が相次いだ。このため一八五二年開校という古い歴史を誇るアントワープ高等商業学校の地位は、相対的に低下することになった。

益田孝との親交が深く、文人実業家として知られる箒庵高橋義雄は、明治二十一年から二年間わたって欧米に遊学している。高橋箒庵の自伝的随筆『箒のあと 上』には、明治二十二年六月頃にブリュッセルを訪れた時の短い記事がある。「其頃益田太郎氏が在学中であった同府の有名なる商業学校から、港湾の設備などを見物し」たことが記さ

れている。首都ブリュッセルのほかアントワープも訪れたのだろうか。しかしながら、益田太郎のアントワープ滞在時期は、明治二十二年六月より遙か後年である。

ところで、洋行から帰ったばかりの高橋義雄が、明治二十三年に刊行した『商政一新』には、ベルギーが世界有数の貿易国であることを指摘し、日本も貿易立国を目指すべきであると説いている。

ここで、孫引きになることを許していただければ、前出の細谷新治『商業教育の曙 下巻』の一八四頁には、河野健二『西洋経済史』からの転記として、一九世紀における主要国の工業発展水準の順位が記されている。それによると、一八一〇年から一八八〇年までの期間、ベルギーは英国に次いで第二位を常に維持していた。そして一九〇〇年になって第一位の米国、第二位の英国に続いてベルギーは第三位に後退している。ちなみに、一八一〇年から一九〇〇年迄の期間において、日本は常に第十一位に甘んじていたが、主要国十一カ国の最下位である。

ともあれ、益田太郎がアントワープ高等商業学校に学んだことは、当時の状況下にあつては正しい選択であつたと言えるだろう。

前出の益田義信『さよなら巴里』には、父太郎のヨーロッパ留学にまつわるいくつかのエピソードが紹介されている。

「明治二十年代には、東京中に洋服屋は、二軒しかなかった。」

「その一軒で作らせた洋服二着を、益田太郎がロンドンに持参したところ、パジャマ用の生地で作られていたという話。」

また、三井物産ロンドン支店に勤務していた叔父益田英作と太郎が、ベネチアに旅行した時のエピソードなどであ

る。

更にまた、「ローズさん」と題する項がある。

かつて、父太郎が留学していたアントワープの下宿屋に「ローズ嬢が健在だから訪ねてやってくれ」と、日本出発前に依頼されているが、義信の渡欧は昭和三年である。父太郎の留学時代からは三十年以上が経過していた。

ローズさんに会った義信は、「ローズ嬢と父は恋愛関係にあったという想像」を抱いていた。しかしながら、ちにローズさんが父太郎に宛てた絵葉書を読むにいたって、二人の関係が「純粹なつきあいでなければ言えないことだ」と思う。わが身にひきくらべて物を考えてはいけなと思う」と記している。

ところで、『一億人の昭和史・日本人(4)三代の男たち(上) 明治・大正編』(毎日新聞社 一九八一年)に「ソロバンと芸術二代 益田孝・太郎」の項がある。そして、「益田太郎の略歴」として、「ベルギー・アントワープ商科大 学首席卒業」と記されている。既に触れたように、当時のアントワープ高等商業学校(商科大学)のレベルは非常に高く外国人にとって「首席卒業」は極めて困難である。

帰国後、劇作に手を深めるようになった益田太郎は、ヨーロッパ遊学中に数多く接した西洋演劇が大いに役立ったと記している。彼自身は、勉学に専念するよりも当時の日本人には珍しい様々な文化を吸収することに積極であったと思われる。

のちに五男二女を得た益田太郎は、七人の子供達をいづれも欧米に留学させている。五人の息子達については第十六及び第十七章で詳しく触れるが、長女信子と次女智恵子も大正十五年にともに米国へ留学させている。

留学に当って益田太郎は、日本では味わえない自由の息吹きと新しい文化を幅広く吸収することを、子供達に求め

ていた。自由人であった益田太郎自身が身につけた体験を、子供達にも望んでいたのだろう。

#### 四 実業家としての出発

十年間に及ぶヨーロッパ遊学を終えて帰国した益田太郎は、その翌年（明治三十三年）、板橋勝全子爵の長女貞と結婚している。貞の祖父板橋勝静は備中松山藩主であったが、嫡子勝全とともに奥羽同盟軍に加わり箱館戦争を戦っている。のち帰順し、やがて旧藩主として子爵の爵位を授けられている。

貞は、また、奥羽白河藩主から老中職についた松平定信の玄孫である。白河楽翁を名乗った定信は、田安宗武の三男であり徳川吉宗の孫にあたるが、文人、歌人としても知られており、数多くの著述を残している。

益田太郎が名家の女性を妻に迎えたのは、父孝に対する高い社会的評価が確立されていたことを示している。

ところで、前出の白崎秀雄『鈍翁・益田孝 下巻』によれば、帰国後の益田太郎は明治三十二年に横浜正金銀行、同三十五年には大日本製糖株式会社入社と記されている。

これまでに何度か引用している白崎秀雄『鈍翁・益田孝 上・下』は良く調べられているが、何分にも茶人及び美術品蒐集家としての益田孝に焦点が定められている。そのため、益田太郎に関する記述を含めて、正確な伝記とは言い難い個所が散見される。

帰国後の益田太郎の経歴に関して先に引用した記述も、そのまま受け入れることは出来ない。ともあれ、後述する

ように明治三十五年の時点では、大日本製糖株式会社はまだ存在していない。

洋行帰りの青年であれば、その頃、外国為替銀行の地位を実質的に独占していた横浜正金銀行に勤務していたと考えるのは極めて自然である。はたして、益田太郎が実際に横浜正金銀行に三年間勤務していたかどうか、手がかりを求めたことにした。

『横浜正金銀行史資料』（昭和五十一年）のうち明治三十二年に関係する第二巻卷之（二）及び、明治三十三年から四十年までの期間に該当する第三巻、そして、東京銀行編『横浜正金銀行全史 全六巻』のうち本件に該当すると思われる第六巻（昭和五十九年刊）に目を通したが、いずれも一般行員の人事に関する記述はなく、益田太郎に関する記述も見当たらない。同書（第六巻）には「横浜正金銀行重役陣異動一覧 一八八〇—一九四七年」が記載されているが、益田太郎の名前はない。<sup>3)</sup>

業務見習いのため、三年間ほどの勤務を前提に益田太郎が横浜正金銀行に入行した可能性は否定出来ない。しかしながら、次に述べるように明治三十六年に二つの企業の役員就任しているが、この時をもって益田太郎の実業家としての出発と考えて良いのではないだろうか。

資料によって確認し得るのは、益田太郎が明治三十六年五月に日本煉瓦製造株式会社の監査役に、また同年七月には大日本人造肥料株式会社取締役に就任している事実である。

西洋文明の流入とともに洋風建築が出現しているが、煉瓦は当時の主要建築資材となっていた。一方、出生地である現在の埼玉県深谷市が煉瓦製造用の秀れた原土の産地であることから、澁沢栄一は益田孝と組んで煉瓦工場の設立を計画した。こうして、わが国最初の機械生産方式による日本煉瓦製造会社が明治二十年十月に発足した。澁沢栄一

と益田孝が、ともに理事として同社の役員に就任している。

日本煉瓦製造株式会社社史編纂委員会『日本煉瓦一〇〇年史』（平成二年）には「役員在任一覧表が記載されているが、本稿の関係者のみを右に記す。

益田孝 理事 明治二十年十月二十二日から同二十七年四月十三日迄

取締役 明治二十七年四月十三日から同三十三年七月二十七日迄

益田克徳 取締役 明治三十二年七月二十二日から翌三十三年七月二十七日迄（逝去）

益田太郎 監査役 明治三十六年五月十一日から同四十五年一月十八日迄

取締役 大正八年十二月二十七日から昭和十四年十一月二十五日迄

益田孝が理事から取締役へと役職目が変わるのは、明治二十六年の商法の一部施行によるものである。

益田克徳は孝の弟であるが、東京海上火災保険、王子製紙株式会社などの取締役を歴任している。

『日本煉瓦一〇〇年史』には「株主構成」が記載されているが、二つの時期について左に記すことにする。

明治三十一年—三十三年

第一位 澁沢栄一 一五八四株

第二位 蜂須賀茂韶（侯爵） 八四五株

第三位 益田孝 六五〇株

昭和十一年 昭和十三年

第一位 澁沢同族 七〇〇株 七二〇株

第九位 益田太郎 一五〇株 一五〇株

同じく、澁沢栄一及び益田孝らを中心に明治二〇年二月に東京人造肥料会社設立に関する株主臨時会議が開催された。明治二十六年の商法の一部施行とともに東京人造肥料株式会社と改稱され、澁沢栄一が初代取締役会長に就任した。

この時、益田孝も取締役も就任しており、明治三十六年七月までその職にあった。そして、父孝の辞任とともに益田太郎が新たに取締役に就任しているが、昭和六年八月まで在任していた。

明治四十一年には、北海道人造肥料株式会社及び帝國肥料株式会社を吸収合併している。更に、翌四十二年以降も大阪硫曹株式会社、中国肥料株式会社などを吸収している。大正十二年には関東酸曹及び日本化学肥料の二社を合併しているが、新資本金二千二百五十万円の大会社となった。

ここまでの記述を参考にした山下三郎『大日本人造肥料株式会社五十年史』（昭和十二年）によれば、大正七年十二月末における主要株主として、第六位に益田孝 四三二〇株、第二十一位に益田太郎 二二七〇株が記載されている。右に記した日本煉瓦製造株式会社及び大日本人造肥料株式会社の設立に当たっては、いずれも澁沢栄一と益田孝が主要発起人となっていた。これらの会社の監査役あるいは取締役に就任していた益田太郎が、実際にどの程度まで会社経営にかかわっていたかは不明である。非常勤役員あるいは名目だけの役員であったとも思われるが、ともあれ益田太郎は実業家としての道を歩き出した。

一方、明治二十九年一月には鈴木藤三郎らを中心に資本金三十万円の日本精製糖株式会社が設立された。同三十七年七月には四〇〇万円に増資されているが、三十九年七月の臨時株主総会では鈴木藤三郎、益田太郎、中村清蔵ら

七名が取締役に就任された。しかしながら、益田太郎が日本精製糖株式会社取締役に在任していたのは僅か四ヵ月間であった。

同年（明治三十九年）九月には大阪にあった日本精糖株式会社を合併している。十一月には大日本製糖株式会社に社名を改めるとともに、資本金を一二〇〇万円とした。この時、旧日本精製糖の鈴木藤三郎らと、磯村音介らとの間に対立が生じた。そのため、益田太郎らの旧役員は鈴木藤三郎らとともに大日本製糖株式会社を去っており、新会社の取締役八名のうち旧日本精製糖株式会社出身は、磯村音介、秋山一裕及び中村清蔵の三名だけであった。

鈴木藤三郎は、益田孝らとともに明治三十年に設立された台湾製糖株式会社の取締役に就任している。前述の日本精製糖株式会社取締役に就任した年（明治三十九年）、益田太郎は同じく台湾製糖の取締役に就任しているが、これについてはのちに詳しく触れる。

明治四十一年には、いわゆる日糖事件が発生しており大日本製糖株式会社は経営危機に直面することになったが、同社社長酒匂常明は自殺に至っている。ともあれ、益田太郎は大日本製糖株式会社の取締役に就任しておらず、渦中に巻き込まれることはなかった。

以上は、西村雄次郎『日糖最近二十五五年史』（大日本製糖株式会社 昭和九年）及び鈴木五郎『鈴木藤三郎——日本近代産業の先駆』（東洋経済新報社 昭和三十一年）を参考にした。

## 五 劇作家としての出発

雑誌「歌舞伎」第七十一号（明治三十九年三月）に、太郎冠者の筆名で、「喜劇に就て」が発表されている。十五歳で西洋に学び、帰国して芝居を書くようになったと、益田太郎は冒頭に記している。そして、

「最初文芸倶楽部へ掲げたのは、東京の裏面を書いた『鴛鴦』といふ喜劇で、続いて『高襟』、『正気の狂人』を書いて、これは本郷座の舞台で演じたが、その次が明治座で演じて居る『玉手箱』だ。私の喜劇は可笑味の内に社会の弊害を諷する真面目な議論が見物の頭へ残る様にするのが主意で書いて居る（後略）」。

また、益田太郎が見聞した西洋の喜劇を次のように紹介している。

「外国には喜劇役者といふものが別にあつてこれを演じるので、その老練な事は、日本などで見る事の出来ない程の腕前を持って居るものがある」。

ところで、右の引用に出てくる雑誌「文芸倶楽部」は、当時の最有力出版社である博文館によって明治二十八年一月に創刊されているが、昭和八年一月まで続いていた。明治期にあつては、春陽堂の「新小説」とともに小説雑誌の先頭に位置していた。文芸雑誌であるとともに、巻頭に有名芸妓の写真に掲載するなど通俗雑誌的な内容を持ち合わせていた。落語、講談などの特集号あるいは、日露戦争当時にあつては戦争小説を集めた特集増刊号などがほぼ定期的に刊行されていたことから、この雑誌の傾向がうかがわれる。

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇百科大事典 第五卷』（平凡社 一九六一年）の「益田太郎」の項を円城寺清臣が執筆しているが、その一部を左に引用する。

「日本の演劇には喜劇が少ないとの持論からはじめ伊井蓉峰のために一人芝居『馬鹿だね』」などを書き、川上貞奴にも頼まれて数作創作した（後略）。

右の記述に従ったと思われるが、戸板康二は「太郎冠者の喜劇」（『悲劇喜劇』一九八二年二月号）で、「馬鹿だね」を益田太郎の処女作としているが、その上演時期については触れていない。一方、『日本近代文学大事典』（講談社昭和五十二年）の「益田太郎」の項には、「明治三十七年ごろから世相風刺の軽演劇を執筆しはじめ」とある。

国立国会図書館所蔵の「文芸倶楽部」明治三十七年十一月号には「喜劇 鴛鴦亭」が掲載されているが、「太郎冠者 思案外史補」となっている。思案外史は、石橋思案の名で知られている。先に引用した「喜劇に就て」では、益田太郎自身は「鴛鴦」と記しているが、「文芸倶楽部」掲載の脚本の題名でも、また、後述するように単行本『喜劇三種』所収の際も、「鴛鴦亭」となっている。

ともあれ、太郎冠者を名乗った益田太郎が脚本家として最初に登場したのは、「文芸倶楽部」明治三十七年十一月掲載の「鴛鴦亭」であったと考えると良いだろう。

明治三十八年から同四十二年までの期間において刊行された太郎冠者の作品計七点が、国立国会図書館に所蔵されている。なお、左に記した作品の(1)から(7)までは脚本であるが、(8)は滑稽小説である。

- |     |        |     |                                 |
|-----|--------|-----|---------------------------------|
| (1) | 『玉手箱』  | 文禄堂 | 明治三十八年                          |
| (2) | 『喜劇三種』 | 彩雲閣 | 明治三十九年（「ハイカラ」「正気の人」「鴛鴦亭」の三篇を所収） |
| (3) | 『思案の外』 | 彩雲閣 | 明治三十九年                          |
| (4) | 『新オセロ』 | 彩雲閣 | 明治三十九年                          |

(5) 『新作喜劇集』 東陽堂 明治四十一年（「啞旅行」「保険きらひ」「女天下」の三篇を所収）

(6) 『女房の心得』 東京図書社 明治四十二年（「渡辺」を所収）

(7) 『出来ない相談』 興文館 明治四十五年

(8) 『腕白小僧日記』 春江堂書店 明治四十二年

右の(2)『喜劇三種』の表紙には、「大隈伯爵序 太郎冠者作」と記されている。大隈重信の署名がある序文の冒頭には、益田太郎には「吾輩も二、三度逢ったが、なかなかの才子」と記している。そして、太郎の母親の兄である矢野二郎を含めた益田家一族を紹介して次のように記している。<sup>4)</sup>

「益田の家庭に集まる人、自から多方面の天才で、或特殊の趣味を持った人達が、類を以（もつ）て集まったとすれば、太郎君は遺伝的天才の上に、小児の時から、家庭の關係四囲の境遇から知らず識らず多方面多趣味の芸術の上にも一種が来りしならんと思はれる」。

そして、「私は太郎君の喜劇の評判は聞いたが、其喜劇は知らぬ。必ず余程面白いものならん」と、正直に記している。また、「余程面白い」と思われる理由として、「太郎君は多年海外に在って泰西の喜劇も見物し、また劇の脚本も通読し」と指摘している。そして、序文の末尾には、

明治三十九年八月 伯爵大隈重信

とある。なお、この『喜劇三種』に収められている「鴛鴦亭」は、「喜劇に就て」で益田太郎は「鴛鴦」と記していることは既に触れた通りである。

(8)『腕白小僧日記』の表紙には、「わんぱく小僧」と記されているが、奥付には「腕白小僧日記」とあり、「太郎冠

者 発行明治四十三年一月 春江堂書店 金三拾銭」などの記載がある。この頃の書籍には、表紙と奥付の書名表記に若干の違いがあることはそれほど珍しくはなかった。

前出の脚本のうち、「啞旅行」「女天下」「渡辺」などが、のちに帝国劇場において上演されている。帝国劇場で上演された太郎冠者の作品については後述するが、題名から推測して、前出の脚本を改作したと思われるいくつかの作品が見受けられる。

また、「啞旅行」は、次章で触れるように明治四十一年九月に川上革新興行第二団によって上演されている。益田太郎冠者は、「川上貞奴」にも頼まれて数作劇作した」と前出の「喜劇に就て」に記しているが、「啞旅行」もそのなかに含まれていることになる。なお、のちに帝国劇場における上演品目では、「啞の旅行」となっている。

明治三十八年五月、落語の「三軒長屋」が劇化されて歌舞伎座で演じられているが、この頃、若手落語達を中心に落語研究会が結成された。このため、新作落語が盛んに演じられるようになったが、なかでも、柳家円左は「毎回新作の落語を演じてこれも成功し、その作者は概ね益田太郎冠者氏であった」と野村無名庵は「芝居になった落語の数々」に記している（「日本演劇」昭和二十一年二月号）。

明治三十八年から四十五年にかけて太郎冠者の脚本計七冊が刊行されているが、その全部が直ちに上演されたわけではない。その一方で、これらの作品は、新作落語のタネ本としては誠得的を得た喜劇であった。

ところで、明治十三年一月、慶応義塾出身者を中心に交詢社が設立されている。『交詢社百年史』（昭和五十八年）には、「福沢諭吉の主唱のもとに、知識を交換し世務を諮詢することを目的として結成された日本最古の社交クラブである」と記されている。そして社交クラブ活動として、明治四十一年二月から翌四十二年一月までの期間に、「家

「族団變の演芸鑑賞会」である清遊会が計十七回開催されている。

前出の『交詢社百年史』には、清遊会における上演品目が記載されているが、明治四十一年九月二十八日の項に、筑前琵琶、人情話の演目とともに、「益田太郎作の喜劇『蓮華草』上演」とある。

更に、明治四十二年一月二十三日には、「義太夫、大倉鶴彦 一中節」とともに、「新古演劇十種の内『戻橋』ピアノ太郎冠者(益田太郎)」とある。実業家大倉喜八郎は大倉鶴彦を名乗っていたが、一中節を好んで演じていたことは良く知られていた。

一方、雑誌「歌舞伎」の「劇文概観」欄は、当時の各新聞紙上に発表された新作劇の紹介及び批評を再録していた。同誌第七十一号(明治三十九年三月一日)には、「昔語日英同盟(脚本) 益田太郎(中外商業)」として、短い劇評が掲載されている。

この頃から、益田太郎は新聞、雑誌に登場している。しかしながら、太郎冠者の名前が広く知られるようになるには、帝国劇場の誕生を待たねばならなかった。

## 六 勃興期の新派

益田太郎が、ともかく企業の役員に就任したのは明治三十六年である。そして、翌三十七年には「文芸倶楽部」十一月号に「鴛鴦亭」が掲載されているが、この頃から太郎冠者を名乗って劇作家の道をスタートしたと考えて良いだろう。その後、明治四十五年に至るまでの時期における執筆活動については前章で触れたが、その時期は、いわゆる

新派の勃興と歩調をあわせていた。

岡本綺堂『明治劇壇 ランプの下にて』（岩波文庫 一九九三年）所収の「明治演劇年表」の明治三十六年の項に次の記述がある。

「近年、川上その他の新派劇は毎回大入りを占めて連戦連勝の勢いを示し、団菊の両名優をうしないたる歌舞伎劇はとかくに圧倒せられたるの観あり」。

ところで、大笹吉雄『日本現代演劇史 大正・昭和初期篇』（白水社 一九六八年）には、太郎冠者こと益田太郎の初期作品の上演について次のように記している。

「『ハイカラ』が高田寛、河合武雄らの一座によって上演されたのが明治三十七年十二月の本郷座、同じ一座によって『正気の狂人』が三十八年六月の同座、川上一座による『玉手箱』が三十九年二月の明治座というようである。（中略）〈幼稚〉や〈大阪俄（にわか）式〉といった評語は、太郎冠者の喜劇にのちのちまでもつきまどった。が、その一言で片づけるのはいささか酷で、笑劇として今読んでも結構面白いものがある」。

同じく大笹吉雄『日本現代演劇史 明治・大正篇』（一九八二年）には、次の記述がある。明治三十九年十月、河合武雄は、川上音二郎に、

「呼ばれて明治座に出て『祖国』（サルドウー作、田口菊汀翻案）と『新オセロ』（益田太郎冠者作）に出演した。

川上は、二月の同座でも『モンナ・ヴァンナ』（メーテルリンク作 山岸荷葉訳）と『玉手箱』（益田太郎冠者作）に出ていたが、『こんな大物は品の上からも芸の上からもまだ無理で、矢張り』『玉手箱』や『新オセロ』の様な喜劇が腕相当だ』（三木竹二「明治三十九年の劇壇」『歌舞伎』第八十一号）と評せられた」

とある。深刻な翻訳劇に比べて、益田太郎冠者作の喜劇は劇評家から一段低く見られていた。

前出の『日本現代演劇史 明治・大正篇』によって、この頃の新派劇団による益田太郎冠者作品の上演状況を辿ることにする。

明治四十年六月

伊井蓉峰、河合武雄らが「女天下」を新富座で上演。

明治四十一年九月

川上革新興行第二団が、「啞旅行」を本郷座で上演。

明治四十一年十二月

高田寛、河合武雄らが「女天下」を新富座で上演。

大正四年十一月

新富座における「玉手箱」の上演。

大正八年七月

同じく新富座における「玉手箱」の上演。

次章で述べる帝国劇場の設立とともに、益田太郎はその取締役に就任している。彼の作品が帝国劇場で人気を得るとともに、太郎冠者は、いわゆる帝劇女優劇の作品執筆に専念するようになった。一方、大正期以降の新派劇の主流は悲劇めいた人情劇に近づいており、太郎冠者の喜劇とは別の道を辿っている。

## 七 帝国劇場の誕生

日露戦争の勝利とともに国民意識が高揚していた明治三十九年十二月、帝国劇場株式会社設立発起人会が開催された。澁沢栄一を創立委員長に、多くの財界人の賛同を得たこの劇場は極めて革新的な一面をもっていた。創立委員に名を連らねていた益田太郎は、大倉喜八郎、福沢桃介らとともに取締役に選任されている。

明治四十一年に川上貞奴が帝国女優養成所を設立した。歌舞伎の女形しか知らない当時の日本においては、女優の存在が理解されず好奇の眼で見られていた。そして、この女優養成所は、のちに帝国劇場附属芸芸学校に移管されているが、帝国劇場名物の女優劇に多くの女優を送り出した。

明治四十三年九月には、専属管弦楽団養成のため研究生が募集され、応募者二百名のなかから二十名が採用された。翌四十四年八月には歌劇部が設立されている。この時、四百名を越える応募者のなかから男子八名、女子七名が採用されているが、そのなかに、のちに舞踊家として知られる石井渚らが出た（古茂田信男ほか『日本流行歌史 戦前編』社会思想社 一九八一年）。

帝国劇場が開場したのは、明治四十四年三月一日である。四月から興行が開始されているが、狂言は、山崎紫紅作「頼朝」と「伊賀越」及び「羽衣」であった。出演者は、梅幸、高麗蔵、鷹次郎などの歌舞伎役者である。

そして、五月には「初めて女優劇を興行。主な女優は森律子、村田嘉久子、初瀬浪子らにて、女優劇の名が好奇心を誘い、意外の大入りを占む」（岡本綺堂『明治劇談 ランプの下にて』）。この時の上演品目に、益田太郎冠者の筆名で書かれた「ふた面」があった。

「ふた面」について、帝劇史編纂委員会『帝劇の五十年』（東宝株式会社 昭和四十一年）は次のように記している。「『ふた面』は当時の帝劇重役だった益田太郎氏が太郎冠者というペンネームでものした初の喜劇。この喜劇が大へん面白おかしく、当りをとったので、益田太郎氏は以後、女優劇というところ、これに類した現代喜劇を次ぎ次ぎに執筆して帝劇の舞台上に上せている」。

同年七月には、柴田（のちに三浦）環（たづな）の独唱会があり、十一月公演では市川高麗蔵が七代目松本幸四郎を襲名した。更に十一月十八日から一週間にわたって、文芸協会公演の「人形の家」が演じられているが、主演の松井須磨子が好評を得た。

翌四十五年二月公演は、

「塩原高尾」

「日の出」（女優劇）

「熊野」

「陽気な女房」（女優劇）

「松竹梅」

の五本立てである。帝国劇場専属の松本幸四郎、尾上松助らが演じる歌舞伎、そして森律子らの女優劇に加えて、オペラ「熊野」らが演じられるという不思議な組合せの公演であった。

謡曲の「熊野」を洋風に歌劇化したこの作品は、当時の観客には全く見慣れない演目である。観客席からは、哄笑と爆笑の連続であったと言われている。前出の『日本流行歌史 戦前篇』には、次のように記されている。

「歌劇部の第一回はこのように、嘲笑の興味をもって迎えられたが、珍妙なものという評判に『熊野』は連日大入満員で、この日本歌劇を見た小林一三が、将来の流行を予見し、まもなく（大正二年）宝塚少女歌劇を作ったというのだから、『熊野』の上演は満更無意味ではなかったのである」。

こうして、革新的な演目とともに、新旧とりまぜた演劇の場を提供していたのが帝国劇場である。

## 八 帝劇女優劇

前出の『帝劇の五十年』には、「主要興行年譜 明治四十四年—昭和三十九年」が掲載されている。

昭和五年一月、帝国劇場は経営難のため松竹株式会社に対して賃貸契約されている。以後は洋画封切館の時代が続くため、帝国劇場開場以来の独自の興行は終止符を打つことになった。明治四十四年（一九一）の開場から昭和四年（一九一九）に至る迄の十九年間において、歌舞伎、歌劇、新劇それに、いわゆる女優劇を加えると約百三十四本の演目が公演されている。そして、最も人気があったと言われていた益田太郎冠者作の女優劇の上演は、延べ四十九本に及んでいる。

ちなみに、公演年度別にみた益田太郎冠者作品の上演状況は、左の通りである。

明治四十四年 「ふた面」「心の声」「三太郎」「心機一転」

四十五年 「渡辺」「出来ない相談」及び、「三太郎」の再演

- 大正二年 「珍竹林」「生蕃襲来」「女天下」
- 三年 「かねに恨」「瓜一つ」「啞の旅行」
- 四年 「女優風情」「執心の鬼」
- 五年 「三つの心」(悲劇)及び、「ふた面」の再演
- 六年 「ドッチャダンネ」「賤機帯三太郎」
- 七年 「嘘の世の中」(喜歌劇)
- 八年 「難病デレテリア」(笑劇)「呪」(アラビア古典劇)「ハテナ?」(笑劇)
- 九年 「ガラガテ」(益田太郎冠者改作)及び、「ガラガテ」「ドッチャダンネ」「女天下」の再演
- 十年 「極楽の鬼」
- 十一年 「ラブ哲学」
- 十二年 「女中難」「乱曲」(メロドラマ)
- 十三年 「クレプトメーニア」(米国喜劇 益田太郎冠者改作)「賢き馬鹿」及び、「執念の鬼」の再演
- 十四年 「月給取」「第一回高速喜劇」「同第二回」及び、「ドッチャダンネ」「クレプトメーニア」「ラブ哲学」の再演
- 十五年 「楽屋口」「唯一度」(益田太郎冠者翻案改作メロドラマ)「第三回高速喜劇」
- 昭和二年 「短篇喜劇四種」及び、「ラブ哲学」の再演
- 三年 「区副整理」「五ヶ国喜劇」「天地の歓喜」

## 四年 「笑と美」及び、「啞の旅」の再演

（右の表は、『帝劇の五十年』の「主要興行年譜」をベースに、向井爽也『にっぽん民衆演劇史』へ日本旅送出版協会 昭和五十二年〇を参考に作成した）

益田太郎冠者と言え、一般には喜劇あるいは笑劇の作者として知られている。しかしながら、右の表に見られるように、彼の作品は悲劇、メロドラマあるいは米国演劇の翻案にまで及んでいる。

この頃の太郎冠者作の脚本で印刷、製本された二冊が、国立国会図書館に所蔵されている。

まず、アンナ・スラヴキーナ、太郎冠者合作として『コメディー 薔薇の答<sup>いっば</sup>』がある。大正十年六月の刊行であるが、主役の守田勘弥、森律子らの写真二十頁と本文九十四頁の構成である。この芝居の「時 現代、場所 巴里」と書きされている。ところで、前出の帝国劇場公演年表には、この「薔薇の答」が上演された記録はない。

もう一冊は、大正十一年四月刊行の「ドラマ 極楽の鬼」である。こちらも、妖婦イサベルを演じた森律子らの写真十頁と、脚本本文五十五頁の構成である。そして、「時 現代—或冬の夜、場所 仏国ベザンソン市—地下室の酒場『極楽<sup>ルバルデ</sup>』」となっている。

奥付によると、二冊とも東京図案所の発行であるが、非売品となっており、「著者 益田太郎」と、その住所「東京市日本橋区濱町一丁目二番地」が印刷されている。これら二作の上演を記念して、私家版として刊行されたのである。

更に、謄写版刷りによる太郎冠者の脚本計三十八冊が、早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に所蔵されている。そして、表紙には「昭和十二年二月 益田太郎氏寄贈」と押印されている。

ところで、関東大震災では帝国劇場も焼失しているが、翌十三年十月には復興開場している。『帝劇の五十年』の記述によれば、「つまるるところ災害都市の見物の多くに受けたのは、たっぷり笑いあり涙ありの太郎冠者の二作品だったと云う」とある。

帝劇女優のなかでも人気があった「ドッチャゲンネ」、「嘘の世の中」、「難病デレテリア」、「ラブ哲学」など益田太郎冠者の数多くの作品は、「何れも概して楽天的な気分で作成された、喜劇というよりは笑劇或はメロドラマだったと云えるだろ」と、『帝劇の五十年』は記している。更に、同書には澁沢秀雄が「帝劇側面史」を書いているが、そのなかに次の一節がある。

「父（澁沢栄一―引用者）の邸には大広間の正面にヒノキの舞台が設けてあり、客を招いた場合、（中略）客への余興としてよく劇を演じた。帝劇の取締役益田太郎こと太郎冠者作の喜劇が多かった」。

そして、

「女優の現代劇、特に益田太郎冠者の笑劇は文壇人に批判されながらも、帝劇名物として成功した」と記している。

益田太郎冠者と同時代の劇作家として、佐藤紅緑、江見水蔭、河竹黙阿弥、右田寅彦、岡本綺堂などの作品が帝国劇場で上演されていた。大正期の文化の一つの側面を代表していた帝国劇場であるが、その経営は思わしくなかった。このため、前述のように昭和五年一月から十年間にわたって松竹株式会社に賃貸されることになった。

益田太郎冠者も、昭和四年に上演された「笑と美」以降は喜劇台本を執筆していない。太郎冠者を脱皮した益田太郎は、実業家の生活に専念するようになっていった。

保証金三十万円、年間賃借料二十七万円（月額二万二千五百円）で借り受けられた帝国劇場は、昭和十五年まで松竹株式会社が入社した外国映画の封切館となっていた。そして、昭和十三年には、松竹楽劇団が演じる「楽劇」との二本立て公演となっていた。この時、益田太郎の息子貞信が次郎冠者を名乗ってミュージカル・ショーの構成・演出を担当しているが、これについては後述する。

## 九 女優森律子

明治四十一年九月に開校した帝国劇場附属技芸学校の第一期生として、森律子など十一名が同四十三年に卒業している。そして、大正七年の八期生まで、五十名を越える女優が養成された。

帝劇名物の女優劇の脚本の多くは益田太郎冠者の作品であったが、その主演女優は森律子であった。戸板康二『物語日本女優史』（中央公論社 昭和五十五年）に次の記述がある。

「律子は、太郎冠者を後援者としていたためもあって、女優たちの中で、トップ・スターの地位を与へられ、あらゆる点で、ミス帝劇という抱負を持ち続けた。

内容的に浅薄とはいえ、大正文化のある一面の特色を示しているオペレッタふう喜劇を堂々と胸をはって演じた森律子は、今思うと、身をもって『帝劇女優』のすべてを、後世の者に感じさせる存在だったと思う」。

また、前出の『帝劇の五十年』には次の記述がある。

「関東大震災後の帝劇の舞台しか知らない人は、益田氏の喜劇といっても旧い作では『賢き馬鹿』『月給取』『ドッチャダンネ』（再演）ぐらいいか見ていないかもしれないが、益田氏の喜劇というと、いつも森律子がひとときわ目立った役で登場し、うるおいこそないがまことにテキパキした爽快な演技で見物席を楽ませていたものであった。そして、劇作家たちからは、つねに『落語めいた茶番劇』とか何とか、酷評をうけながらも、これがいつも真先きに見物に受け、帝劇女優劇の一名物となっていたことは疑いない。『益田さんの喜劇というと、森律子に限らず、殆んど女優たちが、どのほかの出し物よりも際立って冴え、魚が水をえたようにイキイキとしてみえました』と、この劇場の作者主任であった二宮行雄氏も語っている。太郎冠者喜劇がそんなにも受けたことが、帝劇女優劇にとって、果して喜劇であったか、悲劇であったかは、いろいろ問題の生ずる点であろう（後略）」。

ところで、帝劇を代表する女優森律子と、益田太郎の愛人関係は広く知られていた。大正二年三月、森律子はヨーロッパに旅行しているが、その年の十一月には九ヶ月ぶりに帝国劇場に出演している。

この時の律子は、「太郎冠者が愛する新婦朝者のために書いた『女天下』で春木夫人百世を演じた」。その内容は「他愛もない喜劇だが、この作品を収めた小冊子の巻頭の写真には、律子の知的な表情が感じられる。いかにも洋行婦りの顔だ」。

右は、前出の戸板康二『物語日本女優史』からの引用であるが、更に次のように続いている。

「太郎冠者は、その後も長く律子のために脚本を書き、『高速度喜劇』『ひとりトーキー』といった趣向も立てた。律子が早口で舌がよくまわり、淡々としゃべる女優だったからである。（中略）」

そんなふうはこの女優を育てた太郎冠者は、晩年ずっと小田原に住んだが、律子は、昭和二十八年五月十八日に死

に別れる日まで、その別荘の前の石屋の二階に仮寓し、毎日正夫人のいる益田家にかようのを、四年間日課にしていた。

森律子は、『女優生活廿年』、『わらはの洋行日記』及び『わらはの自白』の三冊を残している。『女優生活廿年』（実業之日本社 昭和五年）には「喜劇『ドッチャダンネ』と痛い舞」と題する文章があるが、その冒頭部は次のように記されている。

「益田先生お作の、大物の喜劇『ドッチャダンネ』は、初演以来既に三回も繰返されまして、同じ名をつけたお菓子まで売出されました程、世の人氣に投じた狂言で御座います」。

そして、

「何事も完全を主義とされます作者は、態々大阪から純大阪人を招聘されまして、帝劇の稽古場に大阪語学校が開かれたので御座います」。

ところで、戸板康二『思い出の劇場』の「帝国劇場」の項には、大正十四年に公演された女優劇「柳橋夜話」に触れた個所に次の記述がある。

「同じ時に太郎冠者の喜劇『ドッチャダンネ』が出ていたが、廊下で、この芝居と同じ名前のパン菓子売っていたのを記憶している。パンとまんじゅうを加工したパンジュウという銀座モーリの製品とほぼ同じものだった」。

同名の菓子が売り出されるほど評判になった「ドッチャダンネ」であるが、この喜劇のために益田太郎冠者が作詞した「コロケの唄」が全国的な流行歌となったが、これについては次章で触れることにする。

ふたたび、森律子の『女優生活廿年』に話を戻す。同書の「盜癖病御用心」と題する文章は、益田太郎冠者作「ク

レプトメーニア」のなかで、森律子が演じた「『クレプトメーニヤ』即ち盜癖病を持った富豪の夫人」役に関するエピソードを紹介している。

他に、益田太郎冠者作「高速度喜劇」に関して、「一分間に一千餘字の早口」及び、「第三回高速度喜劇口上」などの文章が、同書に収められている。更に、益田太郎冠者作「月給取」の役作りに関する苦心談などが紹介されている。しかしながら、愛人としての益田太郎との個人的な関係については、この『女優生活廿年』には一切言及されていない。

ここに紹介した『女優生活廿年』は、〈伝記叢書〉として大空社が一九九〇年に覆刻版を刊行している。この覆刻版の巻末には大笹吉雄の「解説」があるが、その最終節は次の文章で終わっている。

「帝劇女優の時代から三井財閥の御曹子である益田太郎冠者（益田太郎）の愛人として過ごし、一生結婚しなかった。この生き方も、中途半端な存在だった帝劇女優とどこかで呼応してはいないか」。

ところで、実業家と女優の濃密な関係として、福沢桃介と川上貞奴の愛人関係が良く知られている。幼い頃の桃介は神童ともてはやされ、見込まれて福沢論吉の婿養子に迎えられている。電力王と称された福沢桃介は、川上音二郎と死別した貞奴と親しい関係になった。

明治四十年に帝国劇場が設立された時、八名の取締役に福沢桃介と益田太郎が名を連ねている。更に、福沢桃介は、大正十五年四月から二年間にわたって帝国劇場株式会社取締役会長に就任している。帝国劇場の取締役であり、有力な台本作者であった益田太郎と、福沢桃介は充分に親しい関係にあったと思われる。

福沢桃介と川上貞奴そして益田太郎と森律子の関係は、いずれも金持ちのパトロンと女優の愛人関係というよりも、

ともに対等な関係にあり、互いの人格を尊重したようである。なお、福沢桃介に関する記述は、宮寺敏雄『財界の鬼才 福沢桃介の生涯』（四季社 昭和二十八年）を参考にした。

ところで、益田太郎の五男貞信氏は今も御健在である。御尊父太郎についていろいろとおうかがいしていた際、たまたま森律子に話が及んだが、「良く出来た方です」と回想されていた。益田太郎と森律子の関係は、家族にも認知されていたということだろう。

## 十 コロッケの唄

大正期の始まりとともに、新しい大衆歌謡の時代が到来している。

古茂田信男ほか編『日本歌謡史 〈戦前編〉』（社会思想社 一九八一年）の「II 歌詞編」には、明治元年以降昭和二十一年に至るまで、「各時代に流行した歌の中から主要なもの」総数七三九曲の歌詞が、各年度別に収録されている。大正二年には「城ヶ島の雨」、同三年「カチューシャの唄」、同四年「ゴンドラの唄」。そして、同年に流行した外国歌曲の訳詞として、「恋はやさし」と「ベアトリ姉ちゃん」の歌詞が収録されている。

大正六年には、「コロッケの唄」が「さすらいの唄」とともに流行している。益田太郎冠者作詞による「コロッケの唄」全四節が同書で紹介されているが、右に引用する第一節の歌詞は、昭和初期生まれ迄の世代の人々には記憶に残っている筈である。

ワイフ貰って嬉しかったが

何時も出てくる副食物はコロッケ コロッケ

今日もコロッケ 明日もコロッケ

これじゃ年がら年中コロッケ

アハハ アハハ

こりゃ可笑し(以下省略)

三家英治『年表で見る日本経済 広告』(晃洋書房 一九九五年)によれば、コロッケが初めて人々の食卓に供せられて人気を得たのは明治三十一年(一八九八)とある。大正初期にあっては、安価な惣菜として民衆の間に定着していたものの、どこかまだハイカラさが感じられる副食物であったのだろう。

益田太郎冠者の名は、「コロッケの唄」の作者として現在にも知られているが、それ以前にも彼の作詞による俗謡が大いに流行したようである。大正期及び昭和初期を通じて茶道研究の第一人者として知られた箒庵高橋義雄は、詳細な日記『萬象録』(思文閣出版)を残しているが、大正二年一月七日の項には「オヤオヤ節の流行」の見出しとともに、次の記述がある。

「(淨瑠璃)乗合船中に益田太郎の作に係るオヤオヤ節と稱する者を加へたるが、其文句も節も丁稚小僧の往来を唄で歩くが如き趣好なれば、近来地方などにも流行する由なり。流行歌、流行語は極めて無造作なる程其流行の区域は広きものなり。オヤオヤ節など其一例として見るべし」。

西洋音楽的要素が加味された大衆歌謡が、東京を発信して日本全国で広く歌われるようになったのは大正初期以降である。大正三年三月、帝国劇場で上演された芸術座の松井須磨子主演「生ける屍」の劇中歌「カチューシャの唄」は、当時二十七歳であった中山晋平の作曲である。学生やサラリーマンなど若い知識階級層の間で人気を博したこの歌は、その翌年に京都のオリエント・レコードが売り出したレコードが二万枚に達した。

こうして、演劇と歌曲を結合した新しいタイプの大衆歌謡が、同じく中山晋平によって次々と作曲されていった。大正四年の「ゴンドラの唄」、同六年の「さすらいの唄」などのヒット曲は今日でも歌われている。こうして、新しく「流行歌」と呼ばれる大衆歌謡が誕生した状況のなかで、「コロッケの唄」が全国的に流行していった。

「日本俗謡調と唱歌調の統一」ともいえる晋平節」（園部三郎『日本民衆歌謡史考』朝日新聞社 一九八〇年）が奏でていた哀調が大衆の心をとらえていたのに対して、益田太郎冠者作詞の「コロッケの唄」は明るさが人々の心をとらえた。「ワイフ貰って嬉しかったがー」で始まる全四節の歌詞はナンセンス歌謡そのものであるが、その頃人口的に増加しつつあったサラリーマン階層に迎えられるハイカラさがあった。第一次大戦の好況下に流行し、戦後恐慌のなかでも生き残った「コロッケの唄」は、大正期を代表する大衆歌謡の一つである。益田太郎冠者の名も、当時にとっては新鮮な流行歌の作詞者として人々の記憶に残ることになった。

ところで、この「コロッケの唄」の全国的な流行をもたらした発信地は、厳密には帝国劇場ではなく、浅草である。ここで、帝国劇場に発して浅草オペラに到る大衆演劇の流れを辿ってみよう。

帝劇歌劇部は、ロンドンのマチステ座舞踊振付師ジョバンニ・ビットリオ・ローシーを招聘していた。ローシー演出の第一回公演は大正二年六月の「魔笛」（抄演）であった。その後、「お蝶夫人」、「天国と地獄」、「ボッカチ

オ」などを上演しているが、興行成績不振のため、大正五年五月に歌劇部は解散されてしまった。その後、ローシーは私財を投じて赤坂にローヤル館を開場し、旧帝劇歌劇部員を集めるとともに新たに新人を募集した。このローヤル館も不振のため閉館をなり、ローシーは失意のうちに大正七年二月に日本を離れていった。

しかしながら、ローシーによって育てられた我が国萌芽期のオペラが、やや変則的な味付けとともに浅草オペラとして花を開かせることになった。大正六年二月一日、常盤座において伊庭孝、高木徳子ら歌舞劇協会のメンバーによって初演された「女軍出征」が、浅草オペラの開幕といわれている。このミュージカル・コメディは連日満員の盛況を続けていた。

更に同年十月には、浅草オペラ常設劇場として日本館が開場し、石井漢、河合澄子、佐々紅華らによって結成された東京歌劇座の旗揚げ公演となった。演目は、ミュージカル・プレーと銘打った佐々紅華作「カフェーの夜」、前出の「女軍出征」及び、山田耕筰作曲の新舞踊「明暗」である。

この時の「カフェーの夜」は、「女軍出征」以上に大好評であった。なかでも、「カフェーの夜」で歌われた「コロッケの唄」と「おてくさん」はたちまち大流行となり、多くの人々によって歌われるようになった(以上の記述は、古茂田信男ほか『日本流行歌史戦前編』による)。

「コロッケの唄」及び「おてくさん」はいずれも、益田太郎冠者の作詞である。「コロッケの唄」は、その年の五月、帝国劇場初演の「ドッチャダンネ」(益田太郎冠者作)の劇中で歌われたことは前述の通りである。この「ドッチャダンネ」は、益田太郎がかつてパリで見たヴォードビルを基本にした歌入り軽演劇の影響を受けていると言われている。ちなみに、前出の『日本流行歌史 戦前編』の「歌詞編」に収められている「コロッケの唄」には、「詞 益田

太郎冠者、曲 外国曲」と記されている。

ミュージカルプレー「カフェの夜」の台本は清島利典『日本ミュージカル事始め—佐々紅華と浅草オペレッタ』（刊行社 昭和五十七年）に収められている。更に、同書には「おてくさんの歌」の楽譜が収録されているが、それによると「益田太郎冠者 作詞・作曲。佐々紅華 編曲」となっている。

佐々紅華は、大正二年に設立された東京蓄音器株式会社（東京れこをど）の文芸部長として、レコード・プロデューサーの活動を開始した。紅華はまた、前述のように東京歌劇座の結成に参加しており、今日におけるプロデューサー兼マネージャーの役割を果たしていた。同劇団公演の「カフェの夜」が思いがけない大ヒットとなったため、東京れこをどは、「コロッケの唄」と「おてくさん」をレコードに吹き込み、売り出している。

「洋式小唄」と言われるジャンルを作りあげた「コロッケの唄」は、何種類もの楽譜が発売されていた。前述の東京れこをどの他に、昭和四年五月にはビクターレコードも、この歌のレコードを発売している（西沢爽『日本近代歌謡史 下』桜楓社 平成二年）。

ちなみに、この「カフェの夜」の作者である佐々紅華は、昭和初期に入って「君恋し」、「浪花小唄」、「祇園小唄」などの大ヒット曲の作曲家として知られるようになった。

浅草オペラは、大正期を通して隆盛を極めたが、関東大震災とともに壊滅した。しかしながら、大正期の文化あるいは風俗を代表した浅草オペラの歴史的価値は現在でも評価されている。

ところで、帝国劇場歌劇部で養成された声楽家に岸田辰弥がいるが、画家岸田劉生の弟である。岸田辰弥は、帝劇歌劇部の解散とともに歌舞劇協会に参加している。その後、宝塚少女歌劇に移っているが、阪田寛夫『わが小林一三』

(河出書房新社 昭和五十八年) に岸田辰弥に関する次の一節がある。

「大正末期の宝塚にて、入団後日が浅いにも拘らず、(中略) 西洋物の岸田と称せられるほどの人気作者になっていた。但し批評家からは、当り外れが多いとか、図太いとか、作風が粗いという指摘もあり、とりわけ多く手がけた喜劇、喜歌劇が安易で俗だと悪評を受けた(「岸田辰弥論」『歌劇』昭和二年五月)。これは彼の出自である帝劇の座付作者益田太郎冠者や指導者ローシーが受けた批判と共通していた」。

岸田辰弥は、大正十五年一月に欧米旅行に出発している。昭和二年五月に帰国したのち「モン・パリ」を発表しているが、宝塚歌劇の代表作となった。岸田辰弥は、彼の弟子白井鉄造とともに宝塚の歴史のなかで忘れられることはない。その岸田辰弥が、まだ若い頃に益田太郎との接点があったことは、記憶されねばならない。

PR誌「銀座百点」一九六四年八月号に「太郎冠者物語」と題する座談会記事が掲載されているが、出席者の戸板康二と益田太郎の息子義信が次のように語っている。

戸板「“モンパリ”を岸田辰弥さんが初めて作ったとき(中略)、これが太郎冠者さんの喜劇にヒントを得ているような気がする」。

益田「それは岸田さんからぼくは聞きました。(中略) 初対面のときに岸田さんが、『わたしが、“モンパリ”を書いたのは、あなたのおとうさんのを頂戴しました』って、はっきりいいました」。

後述するように、洋画家の益田義信は舞台芸術も手がけている。岸田辰弥と会ったのも、舞台美術の仕事に関係していたのだろう。

## 十一 台湾製糖株式会社

日清戦争で勝利を得た日本は台湾を領有することになったが、日本が初めて手に入れた植民地の主要産業として近代的な製糖業の育成が計画されるようになった。一方、三井物産合名会社専務理事として事実上の社長職にあった益田孝も、製糖会社の設立を検討していた。

益田孝の計画を台湾の植民地経営に結びつけた井上馨伯爵（のちに侯爵）らの支援もあって、明治三十三年六月には台湾製糖株式会社第一回創立発起人会が開催された。当日は、台湾総督児玉源太郎、三井三郎助、澁沢栄一などのほか、発起人として益田孝、ロバート・W・アーウィンは元駐日ハワイ公使である。そして、同公使館に勤務していたことがあり、アーウィン

ロバート・W・アーウィンは元駐日ハワイ公使である。そして、同公使館に勤務していたことがあり、アーウィンによって推挙されたのが武智直道である。

台湾製糖株式会社の当初資本金百万円（二万株）の株主構成については、井上馨及び伊藤博文の意向が強く働いていた。先ず、宮内省が内蔵頭男爵渡辺千秋の名儀で一〇〇〇株を引受けている。株主は華族及び富裕階級に限られており、合計九十五人の株主のうち華族が八名を占めていた。一〇〇〇株の株主に公爵毛利元昭そして五五〇株の株主に子爵吉川経健が名を連ねているのは、井上馨や伊藤博文など長州閥関係者と旧藩主のつながりを示しているのだから。

最大の株主は、一五〇〇株を所有する三井物産合名会社である。これに続く一〇〇〇株の株主が内蔵頭（宮内省）と毛利元昭公爵の二名である。なお、内蔵頭が台湾製糖株式会社株主名簿の筆頭に記載されており、三井物産合名会

社がこれに続いている。

第三位の七五〇株の株主も、台湾の陳中和と前出の吉川子爵の二名だけである。そして五〇〇株の株主には、益田孝、武智直道ら六名の發起人に、子爵林友幸そして、藤田伝三郎や住友吉衛門らの富豪を加えた十一名である。なお、三井物産合名会社が企業として唯一の法人株主である。そして、内蔵頭（宮内省）を除いた残りの九十三名がすべて個人株主である。

台湾における植民地経営の中枢的存在となるべき台湾製糖株式会社には台湾総督府の助成金が交付されていたが、完全な国策会社である。しかしながら、同社の製品が、三井物産によって一手に販売されることになっていたのは、この会社の設立にあたって、井上馨や益田孝など三井関係者の尽力が大きかったことによるものである。

台湾製糖株式会社の設立とともに、鈴木藤三郎、益田孝、田島信夫、陳中和及び武智直道ら五名が取締役に選任された。また、ロバート・W・アーウィンは相談役に就任した。

明治三十八年三月、益田孝は同社取締役を辞任し相談役に就任した。翌三十九年八月には益田太郎が取締役に選任されている。

その後の益田太郎は、明治四十二年四月に常務取締役、大正十四年には専務取締役に就任しているが、それに先立って父孝は大正十一年に相談役の職も辞している。

大正十四年の時点における台湾製糖株式会社では、社長に山本悌二郎、専務取締役に武智直道と益田太郎が就任していた。

昭和二年四月に山本悌二郎が農林大臣に親任されたため同社々長を辞しており、武智直道が新たに取締役社長に就

任した。代って平山寅次郎が専務取締役役に選任されており、益田太郎との二人専務体制となっている。昭和十二年十月には平山寅次郎が専務取締役を辞任したため、益田太郎が同社におけるただ一人の専務取締役となった。

昭和十四年には武智直道が社長を辞し相談役となっているが、代って益田太郎が取締役社長に就任した。また、武智直道の息子の勝が同社取締役役に就任している。

昭和十七年、益田太郎は会長に、武田勝が取締役社長に就任した。更に、益田太郎の長男克信が常務取締役に選任されている。そして、戦後間もない昭和二十年十月、益田太郎は会長を辞し、相談役に就いた。

台湾製糖株式会社そして、戦後は台糖株式会社となっても、益田太郎・克信及び武智直道・勝の両家の父子が同社経営陣の中枢を占める時代が続いた。益田太郎とともに、長年にわたって台湾製糖株式会社の経営にたずさわっていた武智直道は、明治三年生まれであるから太郎の五歳年長である。

武智直道も慶應義塾の出身者であるが、明治二十年にハワイのオアフ大学に学び、同二十三年に帰国している。ハワイ遊学時代から、武智は同島の主要産業である甘蔗の栽培や砂糖製造に関心を寄せていたといわれている。帰国後の明治二十三年以降、在日ハワイ国公使館に勤務しているが、同国への官約移民業務を担当していた。なお、駐日公使はロバート・W・アーウィンである。明治二十七年の官約移民廃止とともに、武智直道はハワイ公使館勤務を辞している。

まだアメリカ合衆国に併合されていなかった当時のハワイは、日本にとっては最も身近な砂糖生産地であり、多数の日本人移民が砂糖農園で働いていた。砂糖産業育成を図っていた台湾総督府は、明治二十九年にハワイ産砂糖きびの優良品種を輸入している。

ハワイの砂糖生産に関する十分な知識を買われたのであろう。武智直道は明治三十六年に設立された前述の日本製糖株式会社の監査役に就任している。元駐日公使ロバート・W・アーウィンとともに、武智直道が台湾製糖株式会社の発起人に参加しており、更に同社取締役役に就任したのは、アーウィンの推挙があったとはいえ当然の成り行きであった。

武智直道の経歴に関しては、河野信治『日本糖業発達史(人物篇)』(日本糖業発達史編纂所 昭和六年)を参考にしたが、同書には台湾製糖株式会社の創業当初の状況が興味深く描かれている。

ところで、台湾製糖株式会社の本社及び主要工場は台湾に所在していたが、東京に出張所が設置されていた。東京出張所の構成は、総務部、商務部及び製糖所であるが、事実上の本社機能は東京に集中していた。現地に派遣された支配人が台湾における生産業務を管掌していたが、取締役社長及び専務取締役など主だった役員はいずれも東京に在住していた。

太平洋戦争の終結とともに、台湾製糖株式会社が台湾に所有していた莫大な資産は中華民国政府の手に渡ってしまった。その時点における同社資産の概要について、益田太郎の長男克信は次のように記している。

「台湾本島の北端から南端にかけて点在して居た砂糖工場が十四、酒精工場が二、他にテックス、製紙、フルフロール等の砂糖の副産物の工場並びに付属土地及び農場五万一千町歩、さらに在庫の砂糖、アルコール、ブタノール、糖蜜等を加えると其頃の見込価格で二十数億円、恐らく現在(一九六〇年当時)引用者の金高にすれば一兆円に近い資産を瞬時に失ってしまったと云っていいだろう」。

右の文章は、日本ペニシリン協会『ペニシリンの歩み 一九四六―六一年』(昭和三十六年)所収の「ペニシリン協

会発足十五周年に当りて」の引用であるが、「三代理事長 益田克信（台糖株式会社副社長）」と署名されている。

致命的な打撃を受けた台湾製糖株式会社が、昭和二十五年に砂糖事業が再開されるまでの間、ペニシリン生産によって戦後の混乱を切り抜けた事業については後述する。

この章の記述には、『台湾製糖株式会社史』（昭和十四年）及び『台糖九十年通史』（平成二年）を参考にさせていた。だいた。

## 十一 実業家益田太郎

大正十四年以降の益田太郎の本務が、台湾製糖株式会社専務取締役であることは既に記した通りである。それ以外にも、日本煉瓦製造株式会社、大日本人造肥料株式会社及び帝国劇場株式会社の取締役を兼務していることも既に触れている。

実業家益田太郎に関する記述を拾ってゆくと、例えば、『日本人名大事典 現代』（平凡社 一九七九年）には次の記述がある。

「（明治）三十九年父孝が前年辞任したあとを受けて、台湾製糖取締役に就任。四十二年常務取締役、大正十四年（一九二五）専務取締役となる。千代田火災、森永製菓、帝劇の重役を兼務（後略）」。

この人名辞典では劇作家太郎冠者に関する記述が全体の三分の二を占めているが、昭和十四年に台湾製糖株式会社

取締役社長に就任した事実は記されていない。

また、白崎秀雄『鈍翁・益田孝 下巻』には、益田太郎について

「台湾製糖、帝劇の他、千代田火災海上、大日本肥料、日本煉瓦製造、南国産業、森永製菓等各社の役員をかね、『益田孝男爵の御曹司』たる名士として、世に知られてゐた」と記されている。

演劇史関係の各書も、実業家としての益田太郎冠者の経歴に触れているが、その記述は正確ではない。例えば、前出の向井爽也『にっぽん民衆演劇史』では、

「大正九年現在、台湾製糖、南国産業の重役をはじめ、台湾肥料、千代田火災、大日本人造肥料、万歳生命の各取締役、日本煉瓦、氷妻硫黄、小田原紡績の各監査役を兼ね務めていた。もちろん帝劇の重役でもあった」とある。

大正期刊行の人名辞典を参考にした記述と思われるが、大正期に入ってからの実業家益田太郎の経歴については触れられていない。

大正期以降において、益田太郎が新たに取締役を兼務するようになった企業について、以下の稿で触れることにしたい。

まず、千代田火災海上保険株式会社史編纂委員会『千代田火災八十年史』（昭和五十三年）によれば、現在の同社の源流の一つである千代田保険株式会社が、資本金五〇〇万円をもって大正二年九月に設立されている。

この会社の取締役社長には千代田生命保険の創立者であり慶応義塾出身の門野幾之進が、専務取締役には新井由三郎が就任した。そして、取締役には樺山愛輔、松方幸次郎、益田太郎ら六名が選任されている。樺山愛輔は、海軍大

將樺山資紀の嫡男である。のちに伯爵を襲爵して貴族院議員に選出されているが、千代田火災保険株式会社の取締役社長にも就任している。昭和二十年十月、同社は大倉火災海上保険株式会社と対等合併して、大倉千代田火災海上保険株式会社となった。合併直前の時点において益田太郎は千代田火災保険株式会社の筆頭取締役であったが、合併後の新会社には移っていない。

次に、南国産業株式会社であるが、『台湾製糖株式会社史』に次のように記されている。

「（南国産業株式会社は）蘭領東印度諸島に於ける事業の経営を目的として、大正六年九月、資本金五百萬圓を以て設立せられた会社であるが、爾後の増資によってその資本金は三百五十萬圓となった。当社（台湾製糖—引用者）はこれが過半数の株式を所有してゐる。当初、同社（南国産業—引用者）は主として砂糖製造を爲すため製糖工場を所有してゐたが、爪哇（ジャワ）に於ける製糖事業に対する情勢が甚だしく変化したので、逸早く処分をなすことを得策とし、昭和三年これを他に売却した。現在の主要事業は爪哇に於て護謨（ゴム）、紅茶、規那（キナ）、珈琲等の栽培並に之が販売を爲すことであるが、最近は相当の營業成績を挙げて居る」。

右は、昭和十四年の時点における記述であるが、この会社に対する台湾製糖の持株比率が昭和十一年に七十五パーセントに達していることが『台糖九十年通史』に記載されている。

ところで、ポピュラー音楽作曲家の浜口庫之助は、戦時中の南国産業株式会社に入社している。『ハマクラの音楽いろいろ』（朝日新聞社 一九九一年）に「音楽と人生」の題で浜口庫之助の自伝が記されている。太平洋戦争下における南国産業株式会社の状況を知るうえで興味があるため、次に引用する。

「昭和十七年九月、僕は青山学院を繰り上げ卒業し、南国産業に入社、ジャワへ赴任した。音楽はお別れコンサート

を最後にやめ、実業界で身を立てるつもりだった。

南国産業は、台湾製糖系列の会社で軍が没収したオランダ人の農園経営を委託されていた。僕のいたマラン州には二十三の農園があり、コーヒー、紅茶、ゴムのほかキニーネの原料であるキナやタンニンの原料などを栽培していた。一つの農園で約三千―五千町歩の広さがあり、三千から五千人のマレー人労働者を使っていた。僕の仕事は、農園の見まわりだったから、マレー語もかなりしゃべれるようになった。(中略)

(昭和)十九年になると、社員が次々に兵隊にとられ、農業技術者しかいなくなった。僕は商科出だから二十三の農園の経営を任されるようになった。

昭和二十年の終戦とともに、この会社は消滅している。明確な記録は残されていないが益田太郎の南国産業株式会社取締役在任期間は、大正六年の創立時から解散時にまで及んでいたと思われる。

一方、森永製菓株式会社は明治三十二年に設立され、その後の業容は拡大している。大正十三年には公稱資本金を一五〇〇万円(払込資本金六百万円)に増資しているが、この時、台湾製糖が同社の株主となり、全株式の約三十パーセントを保有している。これは、森永製菓への砂糖販売量を目的とした株式の取得である。

この時点で益田太郎は森永製菓株式会社取締役就任しているが、昭和二十一年まで在任していた。同時に、武智直道も同社監査役に就任し、昭和二十九年まで在任していた。また、益田太郎の長男克信も、昭和十七年に森永製菓株式会社監査役に就任しているが、二十四年以降は同社取締役選任されている(以上、『森永五十五年史』昭和二十九年刊)。

ところで、白崎秀雄『鈍翁・益田孝 下巻』の六十四頁に次の記述がある。

「森永製菓があるとき経営難に陥り、太郎に援助をもとめた。太郎は資金や経営方針の上で助力した。森永は、それがもとで経営は立ちなほり、太郎も取締役になった。

一方、前出の河野信治『日本糖業発達史（人物篇）』の「森永太郎と松崎半三郎」の章には、次のように記されている。

「（台湾製糖）専務である益田太郎氏は森永の株主として、千株許り株を持って居ったのであるが、或日森永工場を参観して、製菓事業の有望なるを感ずると同時に、砂糖の消費を増進する方法は製菓の発達を促すの外はないと言つて帰つたが、それが基となつて、増資の機会に台湾製糖会社として一萬株を持ち、同社々長の武智直道氏が監査役として入つたのである」。

台湾製糖が森永製菓の株式を取得したのは大正十三年の増資時であつたことは、この稿でも既に触れている。

一方、大正十四年（一九二五）の不況時には、前年度における事業拡大の反動もあつて、森永製菓は経営困難に直面している。このため、品川工場など二工場の閉鎖、千五百人の人員整理を実施せざるを得なかつた。大正十三年と同十四年の時間的順序を無視して、「あるとき経営困難に陥り、太郎に援助を求めた」と、白崎秀雄は間違つて記述している。

益田太郎の実業家としての側面を描き出した資料は極めて少い。僅かに断片的な記述を利用出来るが、そのなかに報知新聞社経済部編『財界膝栗毛』（東洋経済新報社 昭和三年）がある。当時の財界人百五十三名とのインタビューを集めた同書は、報知新聞の連載記事をまとめたものと思われる。益田太郎とのインタビューも収められているが、次の一節がある。

記者「近頃はお作を拝見しませんが」

太郎「(前略) もう受けません。やはり時勢でせうね」

記者「でも世間は御本業より副業の方で、かへっていろいろうわさする様ですな」

太郎「いやそれが大衆相手といひますか、舞台や活版になって津々浦々まで広がるので全く本業は忘れられたかも知れません」

右の対話における「本業」は台湾製糖株式会社専務取締役(当時)であり、「副業」が劇作であることは言うまでもない。その副業も、インタビュ記者が言うように昭和期に入って新作の上演は少くなっており、「近頃はお作を拝見しません」状態であった。

「もう受けません、やはり時勢でせうね」と言っているが、この頃の益田太郎自身は劇作に対する興味を失いつつあったのではないだろうか。昭和五年以降、帝国劇場の運営が松竹株式会社の手に移るとともに、太郎冠者の作品が上演される機会も失われてしまった。しかしながら、益田太郎自身は、むしろこうした状況を歓迎していたかも知れない。

前記のインタビューにあるように、世間では副業である筈の劇作が有名になる一方で、「全く本業は忘れられ」ていた。実業家としての存在を明確にする必要性を、その頃の益田太郎は自覚するようになっていたと思われるが、これについては更に後述したい。

更に、三鬼陽之助『会社と経営』(投資経済社 昭和十一年)所収の「財界二代目論」でも、益田太郎がとりあげられている。

先ず、「台湾製糖専務取締役、糖業联合会理事として、糖界第一者の位置に立たされてゐる」と益田太郎を紹介したのち、次のように記している。

「太郎冠者として隋一の喜劇作者の名声を博したことは余りにも有名である。（中略）孝翁の長男に生まれなかつたら、恐らく氏は此の方面で、堂々一家を成して居たろうと思はれる。人生として、その方が幸福であつたかも分らない」。前出書の次の記述は、実業家益田太郎に対する当時の評価を知るうえで興味深い。少し長くなるがそのまま引用したい。

「氏は武智会長の良き半身として、事実上リーダーの形で、テキパキ処理して来たのである。一部では氏を仕方のない怠け者の如く取扱ふてゐるが、それは大きな誤解である。余技が多いとか、出勤時間がマチマチといふ非難は一応受けるとしても、それで全体を律するのは浅薄である。前記した氏の才智と、社会観、政治観は、問題の多い糖業界をよく今日まで大過なく導いて来たのである。この点ほんとうに業界を知る人は認めている（後略）。

すでに六十歳を越えて居るとすれば、これからは益々円熟する許りである。（中略）何かにモウ一奮発せねばならないのである。社会の非難を一度耳に容れる必要があらう」。

財界評論家として知られた三鬼陽之助が指摘しているように、この頃（昭和十年前後）の益田太郎は実業家として一つの転機に近づいていた。

昭和八年五月、益田孝は家督を太郎に譲って隠居しているが、男爵の爵位も太郎が襲爵している（ちなみに、父孝が男爵に授爵されたのは、大正七年十一月二十六日である）<sup>(5)</sup>。

前出の『会社と経営』で三鬼陽之助は、台湾製糖には「益田家譜代の臣とも言ふべき平山寅次郎が居る」と記して

いるが、その平山は昭和十二年に台湾製糖株式会社専務取締役を辞任している。このため、益田太郎は同社ただ一人の専務取締役となるが、彼の上位に在るのは取締役社長武智直道だけである。

同じ年、太郎冠者作の脚本三十八冊が早稲田大学坪内博士記念演劇博物館に寄贈されたことは既に触れている。昭和五年頃から劇作と訣別していた益田太郎であるが、自作の全作品を演劇博物館に寄贈することによって、一つの区切りを明確にしたかったのかも知れない。

昭和十四年七月には貴族院議員に選出されているが、同じ年の十月に台湾製糖株式会社取締役社長に就任している。明治三十九年（一九〇六）に台湾製糖株式会社取締役就任した益田太郎は、その後、常務取締役及び専務取締役を歴任してのち、昭和二十年（一九四五）十月に取締役会長を辞任するまで、四十年間にわたってこの会社の経営にたずさわって来た。また、明治三十六年（一九〇三）に日本煉瓦製造株式会社及び大日本人造肥料株式会社の役員に就任した益田太郎は、とりあえずはこの時から実業界に身を置いたといえるだろう。その後も父益田孝が関係していた企業あるいは、台湾製糖関係会社の取締役を兼務したことは既に触れている。

更に戦後は、現在の台糖株式会社の前身である大東殖産株式会社の取締役に就任したのち、昭和二十五年（一九五〇）に同社相談役を辞任するまで、益田太郎は実業界の人間であった。ちなみに、その時の益田太郎の年齢は既に七十五歳に達していた。

こうして、益田太郎の実業家としての経歴は四十七年間に及んでいる。一方、彼が劇作家として脚本を書いていた期間は、明治三十七年（一九〇四）頃から昭和四年（一九二九）までの二十五年間ほどの期間である。

益田太郎が、台湾製糖株式会社の取締役に就任したのは父孝の威光であったとしても、その後の経営者としての努

力あるいは能力は評価されねばならない。凡庸な経営者であれば、戦前の名門企業である台湾製糖株式会社の経営に四十年間にわたってたずさわること、ついには取締役社長に就任することも不可能であっただろう。

### 十三 ペニシリン生産

晩年に近い時期の益田孝は、食事と健康に十分に留意していた。『自叙益田孝翁伝』には「健康及び食物」、「粗食」あるいは「半搗き米」といった題名の文章が散見される。美食が成人病の原因となることは今日では常識となっているが、栄養不良の日本人が少なくなかった大正末期から昭和初期の頃にあつて益田孝の粗食のすすめは奇異に感じられていた。

益田太郎の長男克信に寄せられた追悼文集『おもいで——益田克信追悼録』（私家版 昭和四十五年）巻末所収の「故益田克信略歴」には、「大正十五年七月 益田農事株式会社取締役に就任」と記されている。益田孝の意向によって、既然大正十五年の頃には小田原の邸宅近くに益田農事株式会社が設立されていたのだろう。『自叙益田孝翁伝』には、「私は余程前から豚を飼っている」と記されているが、益田農事株式会社が経営する農場では十頭ほどの牛が飼育されており、新鮮な牛乳が小売販売されていた。また、益田農場内には罐詰工場が設置されており、蜜柑の罐詰を生産していた。

ところで、事業活動の主体が台湾に置かれていた台湾製糖にとって、敗戦の痛手は一層大きかった。更に、原糖の

供給を海外に依存せざるを得ない日本の精糖業界にとって、原料の調達は完全に杜絶することになった。

こうした状況のなかで、台湾製糖は生き残りのためにペニシリン生産に着手した。昭和二十年九月、前出の益田農事株式会社内に台湾製糖小田原工場が設置された。

台湾製糖株式会社が、「在外会社」として事実上凍結されていたため、昭和二十一年七月に新日本興業株式会社が設立された。同社の営業目的は、ペニシリン及び各種血清・ワクチンなどの製造並びに、八ヶ岳山麓における高冷地農業開墾事業などである。

同社の設立とともに、益田太郎・克信、武田直道・勝らが取締役選任されたが、武智勝が取締役社長に、益田克信ほか一名が常務取締役就任した。その後、大東殖産株式会社と社名を変更し、現在の台糖株式会社に至っている。

その間、ペニシリン生産は本格化し、やがて小田原工場に隣接する元益田毛織工場跡敷地を借り受けている。一方、益田太郎は昭和二十三年に大東殖産株式会社の取締役を辞し相談役に就任している。また、この時、益田太郎所有の小田原工場の土地四〇〇〇坪及び建物延べ二四六坪が七〇万円で大東殖産に売渡されている。

昭和二十五年には、益田太郎は相談役を辞しているが、同時に新資本金三〇〇〇万円をもって台糖株式会社が設立された。取締役社長に武智勝、副社長に益田克信が就任した。更に益田克信は、同じく二十五年から日本ペニシリン協会理事長を勤めている。そして、同協会が昭和三十六年に刊行した『ペニシリンの歩み一九四六—一九六一』に、「協会発足十五周年に当りて」と題する文章を寄せているが、その一部は既に本稿において引用している。

敗戦とともにすべてを失った台湾製糖であるが、更に、台湾やその他外地に在勤していた社員達が続々と引揚げてくる。だが、彼等に与える職も金もないという「何ともいいようのない状態であった」と、益田克信は右の文

章に書いている。そして、

「この時、救いの神になってくれたのが、ペニシリンであった。金も資材もない時であったが、青カビが元で出来る事業ならば、台湾で長年鍛えた醱酵技術は身につけているのだから、正にこれは天来の倖せであると、本来の家業を根こそぎ失った我々はこの仕事に文字通り昼夜を分たず打ちこんだのであった（後略）」  
と述懐している。

戦後間もない頃に益田太郎が台湾製糖株式会社の会長職を辞し、相談役に就いていたことは既に触れている。戦後の混乱期を乗り切るに当って、益田太郎は既に第一線の経営者の職を退いていた。とはいえ、益田太郎が所有していた益田農事株式会社と益田毛織株式会社の土地は、ペニシリン生産工場に利用されており、長男克信がこの事業の展開に尽力することになった。更に益田克信は、

「我々は終戦の前の年、昭和十九年に始めてペニシリンの名を聞き、（中略）其の生産のABCから手ほどき」を受けていたと記している。益田太郎の会長時代にペニシリン生産が手がけられていたことになる。

#### 十四 虚像と実像

前出のPR誌「銀座百点」一九六四年八月号の座談会の冒頭で、益田義信は、十五歳の父太郎が芸者を総揚げにした例のエピソードを紹介している。この話の信憑性あるいは誇張の度合いはさておいて、益田太郎にまつわる伝説として定着してしまっている。

白崎秀雄『鈍翁・益田孝 下巻』では、益田太郎の日常生活を次のように描いている。

「書生・女中・コックなど二十人くらゐの使用人にかしづかれ、十一時起きて入浴、朝食、百にあまる洋服とネクタイの中から、その日の着用分をえらぶ。どんな晴天にも細身に巻いた洋傘を手に、二時頃書生と秘書をしたがへて白馬の馬車で有楽町の台湾製糖へ」。

右の記述がどこまで真実なのか、また、いずれの時期における益田太郎の日常生活なのかは不明である。あるいは、大正期から昭和五年頃までの時期における益田太郎の生活であったかも知れない。

ところで、右に出てくる「白馬の馬車」は、とかく目立っていたようである。前出の『財界膝栗毛』でも、インタビュを担当した新聞記者は次のように言及している。

「今丸の内を馬車で乗り廻すお方はあなたと、長岡さん位のものでせう。それにあなたのは世界がさう簡単には見えてみませんよ」。

ここで言う「世界」は、「世間の人々」を指しているが、益田太郎が好奇の眼をもって見られることは避けられなかった。

一方、女優森律子との愛人関係は公然と知れわたっていたが、スキヤンダルとして非難されることはなかった。権力者あるいは富裕階層の人々が愛人を持つことが指弾されなかった当時の時代環境によるものであろう。

益田太郎に大きな関心を寄せていた戸板康二は、「太郎冠者の喜劇」(「悲劇喜劇」一九八二年二月号)で次のように記している。

「いい時代に、たっぷり小遣いを使ってパリの日々を楽しんだ太郎冠者の半生は、どこか大デュームのような闊達さ

が見られる。

獅子文六氏のなくなる直前に、毎日新聞にこの人を書く構想があったのは、偶然ではない。

パリで盛大に浪費し、「バロン」と稱されていた薩摩治郎八を主人公にした小説「但馬太郎治伝」を、獅子文六は書いている。治郎八は、現実には「男爵」の爵位を持っていたわけではない。これに対して、実際に男爵を襲爵した益田太郎を主人公にした小説に、獅子文六は大いに食指を動かしていたことだろう。

「但馬太郎治伝」は、読売新聞に昭和四十二年四月十八日から九月二十三日まで連載されている。そして、それから二年後の昭和四十四年に文化勲章を受章した獅子文六（岩田豊雄）は、その伝達式の一ヶ月後に急死している。益田太郎を小説に描き出す構想は、惜しくも実現されることなく終わってしまった。

昭和初期の性風俗雑誌「グロテスク」など発禁本の出版者として、梅原北明がいる。その息子である梅原正紀が『近代奇人伝』（大陸書房 昭和五十三年）に書いた「梅原北明」の章に次の一節がある。

「北明は監視の目を盗んで、（中略）時には当時として珍しい高級乗用車を読書会員で財閥の御曹子の益田太郎（三井系）から借り、車の中を編集室として仕事をすすめた」。

山口昌男『「挫折」の昭和史』（岩波書店 一九九五年）には、前出の『近代奇人伝』を借用したと思われる次の記述がある。

「時には、当時では珍しい高級乗用車を読書会員の益田太郎から借りて、その車中で編集に携わった。この益田は、三井系の大番頭の益田鈍翁の伴で、太郎冠者と名乗って帝劇の舞台で数々の喜劇を上演し、『コロッケの唄』の作詞をしたりした男爵であった」。

右の記述から浮かび上がってくる益田太郎のイメージは、典型的な金持の道楽息子である。そのような人物であれば、発禁本の出版者に「高級乗用車」を提供しても、それほど奇異に感じられないだろう。

しかしながら、その頃（昭和初期）の益田太郎が専務取締役を務めていた台湾製糖株式会社は、その設立時に置いて宮内省が第二位の大株主である。

前出の『台湾製糖株式会社史』によれば、昭和十四年三月三十一日現在における同社の資本金は六千三百万円、発行株式は百二十六万株である。株主数は一万四百九名に過ぎず、大株主に持株が集中しており、優良企業や富裕階層が主要株主である。なかでも宮内省が所有する株式数は三万九千六百株であり、全株式の三・一四パーセントを占めていた（昭和十四年三月末現在）。台湾製糖株式会社は、皇室の「殊恩を辱うし」ていることを誇りとしていた（『台湾製糖株式会社史』）。

天皇制が社会・政治体制の頂点にあった戦前において、台湾製糖株式会社は絶対的な名門企業であった。更にはまた、時代の風潮としてファシズム的傾向が強まってゆくに従って、名門企業の経営者である益田太郎は、自からの身の処し方に十分に慎重であったと思われる。昭和初期以降の益田太郎は、彼の前半の人生の生き方とは大きく変わっていっただろう。

益田太郎は、確かに小説の主人公たり得るほどの経歴の持主である。このため、無責任な伝説によって虚像の益田太郎が作りあげられている可能性は否定出来ない。

## 十五 評価

雑誌「日本演劇」昭和二十二年二月号は、戦後の混乱期にあって「喜劇論」を特集しているが、澁沢秀雄が「太郎冠者の喜劇」を書いている。その論稿の冒頭では、益田太郎冠者に対する評価として、久保田万太郎の言葉を紹介している。

「そのむかし帝劇で盛んに上演されたあの喜劇は、何か大正といふ時代を象徴しているやうな気さへします（後略）。澁沢栄一の四男である秀雄は、二代目実業家として、また文化人として知られていたが、益田太郎との類似性を共有している。そして、昭和十八年から二十二年まで東宝株式会社取締役会長の職にあった澁沢秀雄の太郎冠者論は、次の記述に集約されている。

「太郎冠者の喜劇は、（中略）飽くまでも笑のため、娯楽のための娯楽を目標としていた。（中略）時に若干社会に対する諷刺的な色彩を帯びることはあった。

太郎冠者は大実業家といふ広い視野から喜劇の取材範囲を拡大し、新しく組立てた滑稽第一主義に音楽舞踊を混じて大衆性を与へた点は確かに先覚者であったが（中略）、中には人物も事件も台辞も演技も、只是人を笑はせるための道具立（て）に過ぎず、見ている方が恥ずかしくなるものもあった」。

とはいえ、大正時代にあった

「当時太郎冠者ほど民衆を爆笑させた作者は少なかったろうと思ふ」。

わが国においては、従来、悲劇の深刻さに比べて、喜劇の価値は過少評価されていた。戦後になって、喜劇が正当

に評価されるようになると、喜劇作家の先駆的存在である益田太郎が見直されている。とはいえ、経営者としての益田太郎の評価は試みられることはなかった。

前記の太郎冠者論を書いた澁沢秀雄の父栄一は、益田太郎の父孝といくつかの企業の創立に関係したことは、これまでに触れている。

そして、白崎秀雄『鈍翁・益田孝 下巻』に次の一節がある(同書六十四頁)。

「君の息子は実に不思議な人だね、劇作家で、その上経営がわかるんだから」

澁沢栄一はあるとき、鈍翁にさういった。

「さあ、なにをやってるもんですか」

鈍翁はさう答へた。太郎は有能であったにしても、もとよりその父親のやうでは、ありえなかった。ある必要はなかった。いや、あつてはいけなかったのである。

父親にとっては、彼はつとに、遠く手のとどかぬはるかな地点に行ってしまった。

澁沢栄一と益田孝との間に、実際に右に引用した会話があつたかどうか。個人的な関係でどれほど親密であつたかは別として、ともに有力な実業家として親交があつた澁沢栄一と益田孝の間に、こうした会話が交わされる可能性は大いにあつただろう。

右の会話に関する詮議はさておいて、益田太郎が父孝よりも有能で「ある必要はなかった。いや、あつてはいけなかったのである」と、白崎秀雄は一方的にきめつけている。

益田太郎の経営者の資質が、父孝と同じである筈はなく、その可能性もなく、その必要もないという、右に引用し

た独断的な判断は極めて象徴的であるが、世間一般の評価でもあっただろう。

昭和三年に刊行された『財界膝栗毛』（前出）のインタビューで新聞記者が、「世界は御本業より副業の方で、かへっていろいろわざわざする様ですね」と問いかけている。確かに、副業である筈の劇作家としての益田太郎像がクローズアップされてしまって、その分「御本業」である実業家としての評価が看過されている。事実、わが国近代演劇史において太郎冠者については必ず言及されているが、明治以降の日本経営史において益田太郎が登場することはない。益田太郎の実像の部分が見過されて来たと言えるだろう。

益田太郎は、昭和二十八年九月十八日、老衰のため小田原で歿している。享年七十八歳であった。益田太郎の自由的気質は、次章以降で述べるように五人の息子達に継承されている。

## 十六 息子達

益田孝は側室たきとの間に庶子の信世を得ているが、太郎はただ一人の嫡出子である。

一方、太郎は子宝に恵まれており、五男二女を得ている。

まず、長男の克信が明治三十四年に生まれている。大正八年に慶応義塾普通部を卒業したのち、渡米している。四年間にわたる滞米期間中に、ペンシルバニア大学などで修学した。

帰国後、大正十三年に芝浦製作所に勤務しているが、昭和六年四月には台湾製糖株式会社に転じている。台湾製糖

入社とともに特別休職となり、三井物産株式会社砂糖部に出向している。三井物産は台湾製糖の製品を一手に販売していたため、営業部門の業務習得が出向の目的である。

その間、昭和四年には元待従の子爵海江田幸吉の長女恵美と結婚している。一方、海江田家の長男である海江田一郎は、一九七五年から八十年まで台糖株式会社取締役社長に在任しており、その後は同社の会長及び相談役を歴任している。

益田克信は、昭和十二年に台湾製糖株式会社調査役を命じられており、同十七年十月には同社常務取締役選任されている。その後、昭和二十五年五月に台糖株式会社副社長に就任する迄の経緯については既に触れている。

昭和三十年、米国のチャールズ・ファイザー社との合併によって台糖ファイザー株式会社が発立されると、益田克信は同社の取締役社長に就任している。同三十九年三月、惜しくもこの世を去っているが享年六十二歳であった。

以上は、前出の『おもい出 益田克信追悼録』の所収の「故益田克信略歴」を参考させていただいた。同書の冒頭には、長男克幸の「『おもいで』に寄せて」と題する文章があり、次の一節で始まっている。

「あなたの一番尊敬する人は誰ですか……」

ある新聞記者の問に、父克信は次のように答えています。

「それは、父益田太郎です」

「あなたは幸せなんだ。自分の父親をね……」

そして、死が近づいていた父克信の次の言葉が紹介されている。

「三井の恩を忘れるな」

「三井とうまくな……。ファイザーともな」

死の前日に遺した言葉でした。

益田太郎の実業家としての資質と事業を最も多分に継承したが、長男克信であった。

明治三十六年十月に次男孝信が、同三十八年に三男義信が生まれている。

『人事興信録 第三十三版』（昭和六十年）には「益田義信」の項があり、次の記述がある。

兄孝信 明治三十六年十月生まれ、パーミンガム大学卒、益田産業社長

弟智信 明治三十九年六月生まれ、英国リーズ大学卒、三友エイジェンシー会長

次男孝信については、右の簡単な経歴以外の資料は未見である。

扱って、三男義信は昭和三年に慶応義塾大学を卒業したのちパリに留学している。この時、英国に留学する弟智信が、パリまで同行した。

「昭和七年帰国して国画会に出品。のち会員となり梅原龍三郎の愛弟子の一人といわれた」（日外アソシエーツ『現代日本人名録下』紀伊国屋書店 一九八七年）。

洋画家として知られた義信は、国際造形芸術連盟名誉会長、日本版画協会顧問、日本美術家連盟相談役の役職を歴任したことが、前出の『現代日本人名録』に記されている。

また、藤原歌劇団公演の「楊貴妃」や「セビリアの理髪師」などの舞台装置あるいは美術考証を担当したことが、

日本オペラ振興会編『日本のオペラ史』（岩波ブックセンター・信山社 昭和六十一年）に記されている。訳書に『ボナール』、『ピカソと其の友達』、『親友ピカソ』があり、著書としては既にこの稿でも再三引用した『さよなら巴里』がある。他に、双葉十三郎らとの共著『モンマルトル 青春の画家たち』（新潮社 一九八六年）が出版されている。

四男智信については、これまでに引用した白崎秀雄『鈍翁・益田孝 下巻』に若干の記述が散見される。それによると、大正十五年に慶応義塾予科を卒業後、三年間にわたって英国中部のリーズ総合大学毛織物学科に学んだ。英国の毛織物技術を習得せよというが、祖父孝の意向であったと記されている。

帰国後は三井物産に入社し、織維部に配属された。昭和五年、当時の三井物産株式会社取締役社長三井守之助の三女倭子しごことはげしい恋愛の末に結婚している。祖父孝は、智信の恋愛に反対していた。

「万一この婚姻が途中で破綻すれば、三井家を傷つけることになり兼ねない。鈍翁は、主家の娘を娶ることの不可を説いたが、智信の情熱に抗し切れず、つひに婚姻を認めた」と、前出の白崎『鈍翁・益田孝 下巻』は記している。

昭和十二年頃、祖父孝は小田原の邸宅に隣接して益田毛織物会社を設立している。『鈍翁・益田孝 上巻』によれば、この益田毛織は、

「掃雲台の茅華門の向かって左手には受付の事務所があり、そのまた左隣にその毛織物工場があった。昭和五十三年始めには『台南株式会社』と看板の出ている建物であった。ここに動力の織機二十台ほどを置き、二、三十人の女工を雇って、鈍翁は孫の益田智信に指導させて、ホームズパンその他の生地を織らせていた」。

女工たちは、「掃雲台出入りの多くの職人の娘とか付近の」女性達である。

明治四十四年九月に生まれた五男貞信は、三男義信とともに父太郎の芸術家的な気質を最も多く継承していると言

えるだろう。

貞信は、慶応義塾大学経済学部を卒業したのち、父太郎との約束に従って、三井信託会社に三年間勤務した。そのあとはアメリカに遊学している。

益田太郎の五人の息子達は、いずれも慶応義塾で学んだのち欧米に留学している。慶応義塾の卒業課程が、兄弟によって普通部、予科、大学と異なるのは、各人のそれぞれの事情に委ねられていたようである。この辺にも、父太郎のおおらかさと自由人気質がうかがわれるようである。

ところで、内田晃一『日本のジャズ史 戦前戦後』（スイングジャーナル 昭和五十一年）には、「カレッジアンズ・バンド」の項があり、次のように記されている。

「大正十四年（一九二五）頃、アメリカから果実王の息子で二世の堂本菅次が帰国した。堂本は品川・御殿山に豪壮な邸宅をかまえる『太郎冠者』こと劇作家、益田太郎男爵の家に寄宿した。同家にはアメリカ婦りの克信、孝信、義信、智信、貞信の『五信』の息子が同居しており、彼らは堂本の首頭でさっそく『カレッジアンズ』というジャズ・バンドを作った。

——ある日（中略）品川・御殿山のお屋敷へ遊びに行ったら、お嬢さんお二人のピアノ演奏、あらゆる楽器をならべてのご兄弟のジャズ演奏、それになんとレコード録音機まで揃っていてびっくりした（菊池滋弥）

この大変ぜいたくな金持のジャズ・バンドは、『内職に行ってお金をもらうのはイヤだ』という理由で、いつの間にか活動をやめてしまった」。

右の引用のなかに、菊池滋弥の述懐が記されているが、その父親は貴族院議員菊池武徳である。大正八年、父に同

行して渡米しているが、その時にジャズの魅力にとりつかれたという。昭和二年、慶応義塾の学生を中心に編集され、同校のスクール・カラーにちなんで名づけられた「レッド・アンド・ブルー・ジャズ・バンド」のリーダーが、菊池滋弥である。この学生バンドには、四男の益田智信が参加してトランペットを吹いていた。

「レッド・アンド・ブルー・ジャズ・バンド」が、昭和二年秋にコロンビア・レコードで吹き込んだ「マイ・ブルー・ヘブン」、「アラビアの唄」が好評を得た。そして、これがわが国で録音された最初のジャズ・レコードであると、前出の『日本のジャズ史 戦前戦後』に記されている。

一方、三男の益田義信の音楽について、瀬川昌久『ジャズで踊って——舶来音楽芸能史』（サイマル出版会 一九八三年）に次の記述がある。

「昭和十三年十二月の『タバコ・レビュー』十一景は、いろいろな種類のタバコの名前をテーマにした珍しいショーで、演出、選曲、装置も益田義信が担当した」

とある。そして、日本劇場で上演されたこのレビューは、「なかなかおもしろく、しゃれた構成はさすがであった」と評している。

更に、益田義信については、

「フランスに長く滞在し、早くから洋画家として一家をなしていたが、昭和初期には菊池滋弥や堂本誉次と学生ジャズバンドをつくった仲間で、戦前の西欧モダニズムを身をもって実践した人」と記している。

ところで、茶人として知られた益田孝は秀れた美術品収集家であったが、息子の太郎は茶道にも美術品収集にも興

味を持たなかったようである。昭和二十八年五月に益田太郎が歿した後、益田家に所蔵されていたすべての美術品が一括処分されることになり、画家である三男義信に一任された。

田中日佐夫『美術品移動史——近代日本のコレクターたち』（日本経済新聞社 昭和五十六年）には、鈍翁収集品売却の経緯が記されている。益田義信の交渉によって、東京日本橋の古美術商瀬津雅陶堂に一括して売り渡されることになった。次に、『美術品移動史』の一節を引用する。

「なにしろその量はおびただしいものであった。（雅陶堂の）当主である瀬津巖氏の談によれば一年に四回ずつ、そのたびにトラックで益田家の蔵に通って、なんと十五年続いてまだ残っていたという」。

鈍翁益田孝の収集品は、量的に膨大であるばかりでなく、質的にも秀れていた。益田義信は、「芸術新潮」昭和二十八年十月号に「家伝の『源氏絵巻』——わたくしの国宝」を書いていく。それによると、祖父の孝は、所蔵品が国宝あるいは重要文化財に指定されることを「極度に嫌っていた」。しかしながら、所蔵の「源氏物語絵巻」は国宝に指定されている。

益田家旧蔵の「源氏物語絵巻」は、美術品収集家として著名な高梨仁三郎の手に渡ったのち、昭和三十四年に三億円で購入されて五島美術館の所蔵になったと、前出の『美術品移動史』は記している。

益田孝の秀れた収集品は息子の太郎を素通りして、孫達によって換金されることになった。売却代金は相続税などの納付に充当されるとともに、太郎の息子達の間で分配されている。

## 十七 次郎冠者

明治四十二年一月の交詢社清遊会で益田太郎がピアノを演奏したことは、先に『交詢社百年史』の記述を引用している。明治九年生まれの実業家がピアノを弾くことは、当時にとっては全く稀有の存在であっただろう。

そうした益田太郎の資質に影響されたのか、五人の息子達はいずれも音楽を良くし、昭和初期にあっては全く先駆的なジャズ・プレーヤー達であった。なかでも五男の貞信は、のちにプロの演奏家として通用する才能を持ち合わせていた。

昭和初期の日本のジャズ史には、益田太郎の五人の息子達に関する記述が必ず見られる。

彼等はいずれも素人芸を遙かに越えた技能であったと言われている。しかしながら、演奏活動によって金銭を得ることを忌避していたため、ジャズ・プレーヤーを職業をする必要はなかった。そして、戦前の軽音楽界で最も知られていたのが益田貞信である。

前出の『日本のジャズ史 戦前戦後』には「戦前派ミュージシャン略歴紹介」が収められており、「益田貞信（ヘビアン）」の項に次のように記されている。

「明治四十四年（一九一）東京生まれ。大正末期にアマチュア楽団を組織、カレッジ・ジャズの普及進展に寄与した益田五人兄弟、いわゆる五信（克信、孝信、義信、智信、貞信）の末っ子。兄弟中ただひとりプロ・ミュージシャンとなり、戦後ニュー・グラランド・ホテルで演奏していたが、現在は建築設計会社社長（後略）」。

益田貞信の代表的な音楽活動に、松竹楽劇団の編成及び、帝国劇場における同楽劇団公演の構成・演出がある。前

出の『ジャズで踊って』には、この時の益田貞信の仕事を十五頁にわたって詳しく記している。更に、乗越たかお『ダンシング・オールライフ 中川三郎物語』（集英社 一九九六年）の記述を参考に、日増しに戦時色が濃厚となっていた時代における益田貞信を追ってみよう。

昭和十二年秋、益田貞信は大谷博とともに松竹楽劇団を編集している。水野子爵家に生まれた博は大谷竹次郎の婿養子となり、松竹株式会社常務取締役として同社歌劇部長の職にあった。

東京の松竹歌劇団（SSKD）を大阪松竹歌劇団（OSSK）の一部メンバーに、男性ダンシングチームとコーラスを加えた松竹楽劇団が編成された。松竹株式会社社内の運営組織である歌劇部部长大谷博に全面的に協力したが、益田貞信であった。

昭和十三年四月二十八日、松竹楽劇団の第一回公演が幕開けした。「スキング・アルバム」全十二景は約一時間の上演であるが、その頃の帝国劇場は松竹傘下の洋画封切館であったため映画との二本立て興行であった。

益田貞信によってコーラス・グループのリズム・ボーイズが編成されたが、音楽担当には紙恭輔、服部良一、藤浦洗が名を連らねていた。また、歌手としてベティ稲田、三笠静子（のちの笠置シズ子）が出演していたが、約二週間にわたる興行は連日満員であった。

翌五月には、第二回公演として「踊るリズム」全十二景が上演されている。

同年六月上演の第三回公演「ブルー・スカイ」全十二景と、翌七月の第四回公演「ら、ぼんぼ」十五景では、「益田次郎冠者演出」として初めて貞信の名が表面に出ている。「次郎冠者」とは、言うまでもなく父太郎が名乗った「太郎冠者」を意識したネーミングである。

このあと、益田貞信は松竹楽劇団を離れている。日中戦争が長期化の様相を強めていた当時において、スイング・ジャズを中心に上演された楽劇（今日の名称ではミュージカル・ショー）は人々に迎え入れられたが、国策に沿った興行ではなかった。

益田貞信が去ったあと、紙恭輔も松竹楽劇団を去っている。あとを継いだ服部良一は、三笠静子とコンビを組み「ラップと娘」や「センチメンタル・ダイナ」によって好評を博した。三笠静子はのちの笠置シズ子であるが、戦後間もない頃、服部良一の作曲による「東京ブギ」や「買物ブギ」が大ヒットとなったことは人々の記憶に残っている（向井爽也『っぽん民衆演劇史』日本放送協会 昭和五十二年）。

ところで、これまでにこの稿で何度か触れている文人実業家高橋義雄（箒庵）の長男に忠雄がいる。音楽を愛好する家庭に育った高橋忠雄は、のちにアルゼンチン・タンゴの解説者として知られるようになる。

五十歳で再婚した高橋義雄が初めて得た息子である忠雄は、明治四十四年の生まれであるから益田貞信と同年である。二人とともに慶応義塾大学経済学部を卒業しており、彼等の父親である高橋義雄と益田太郎は互いに親交があった。

昭和十三年七月頃、「高橋忠雄の南米レビュー『南十字星』が大ヒットした」と、前出の瀬川昌久『ジャズで踊って——舶来音楽芸能史』に記されている。当時の高橋忠雄は、南米旅行から帰国して間もない頃である。翌十四年五月には、

「日比谷公会堂で盛大な『中川三郎ハタアズ楽団』公演会を催した。これこそ規模といい、演出スタッフの充実といい、まさに戦前日本のジャズとタップの歴史における頂点を記録する豪華なものであった。

案と作は、中川のほかに高橋忠雄と益田貞信が名をつらね（中略）全日本ナンパーワン選技スイング・オーケストラと同タンゴ・オーケストラという、当代一流プレイヤーを集めたオールスター・バンド」と、前出の『ジャズで踊って』に記されている。

益田太郎が喜劇作家として示した才能は、今日の言葉によればサブカルチャー志向である。そしてこの資質は、五男の貞信によって最も良く継承されていると言えるだろう。

益田太郎の五人の息子達は、型にはめられず、それぞれ独自の道を進んでいる。勿論、益田男爵家に蓄積されていた莫大な財産によってそうした生き方が可能であったのだろうが、父益田太郎の極めて柔軟な思考と生活態度が反映されていたとも言えるだろう。

## 注

- (1) 白崎秀雄『鈍翁・益田孝 上巻』によれば、「明治元年秋、まさしゑゐは長男象を産んだが、翌二年六月十四日、脳膜炎によって生後一年を経ることなく夭した」とある。
- (2) 竹内成『明治期三井と慶応義塾卒業生』の二〇三頁には、益田太郎に関する次の記述がある。  
「慶応義塾への入社時期は不明であるが、益田孝の子息であり、後年、三越呉服店の重役になる益田太郎がいる。彼の出身地、入塾證人も不明になっている。」  
本文でも述べているように、益田太郎が「三越呉服店の重役」になった事実はない。十七年間にわたって同社取締役に就任していた叔父益田英作との混同である。
- (3) 旧東京銀行のOB会である「正友会」事務局には、明治四十年代以降の横浜正金銀行職員名簿が保管されているが、それ以前の時期における一般行員の入・退社に関する記録は現存していない。

(4) 矢野二郎は、益田太郎の母ゑゐの兄である。文久三年、幕府の遣欧使節団に参加し、帰国後は騎兵特校に任じられた矢野次郎は、その間、益田孝と行動をともにしていた。明治九年に商法講習所所長、明治二十年には高等商業学校校長に就任しているが、現在の一橋大学の遠い源流である。

(5) 霞会館諸家資料調査委員会編『華族制度資料集——昭和新修華族家系大成別巻』(霞会館 昭和六十年)の益田孝の頃には、  
「依勲功特授男爵 大正七年十一月二十六日」とある。

## おわりに

筆者が先に書きあげた「文人実業家高橋義雄の生涯」では、明治期後半を実業家として、大正期及び昭和初期を茶人及び文人として生きた一人の教養人の軌跡を辿った。箒庵高橋義雄は、五十歳で実業家に決別しており、残りの人生は文人そして茶道研究家の生活に専念している。

一方、ここにとりあげた益田太郎は、昭和四年に帝国劇場で上演された「笑と美」を最後に、喜劇の執筆及び発表を行っていない。それに先立って、益田太郎は大正十四年に台湾製糖株式会社専務取締役就任しているが、その頃から経営者の生活に専念している。しかしながら、益田太郎の自由人的気質は、彼の五人の息子達に見事に引き継がれていったと言えるだろう。

本稿の執筆に当っては、益田太郎の末子である貞信氏から興味ある話を伺うとともに、いくつかの資料の存在を御教示いただいた。一九九六年九月で八十五歳の誕生日を迎えられた貞信氏の四人の兄上は既にこの世を去っておられるが、二人の姉上は御健在とお聞きしている。

益田貞信氏を御紹介いただいたのは、同氏と縁戚関係にある本学法学部長波多野裕造教授の御好意によることをここに記し、改めて謝意を表したい。

また、台糖株式会社事務部長村上孝彦氏ほか多くの方々にも御協力いただいたことを付記したい。

#### 参考文献

参考にした資料及び、引用させていただいた文献は、いずれも本文及び注に明記しているが、更に次の各書を参考にした。

『大正人名辞典Ⅲ 中巻』（日本図書センター 一九九四年）

浅見雅男『華族誕生——名譽と体面の明治』（リポレポート 一九九四年）

安岡重明『三井財閥史』（教育社 一九七九年）

松浦善三『帝劇十年史』（玄文社 大正九年）

矢吹時中編『帝劇十年』（矢吹高尚堂 大正九年）——帝劇開場後十年間の写真集

円城寺清臣編『帝劇二十年』（帝劇旧友会 昭和三十六年）——帝劇開場後十年間の興行年表が中心

旗一兵『喜劇人回り舞台』（学風書院 昭和三十三年）

田中英機編『大衆芸能資料集成 第九卷』（三一書房 一九八一年）

早稲田大学坪内博士記念演劇博物館編『演劇博物館資料ものがたり』（一九八八年）

角田房子『碧素・日本ペニシリン物語』（新潮社 昭和五十三年）

（本学兼任講師）